

新町遺跡 3区・4区・5区

新町遺跡 3区・4区・5区



2020

埼玉県坂戸市教育委員会

2020.2

埼玉県坂戸市教育委員会

新町遺跡 3区・4区・5区

2020.2

埼玉県坂戸市教育委員会

序

坂戸市は、埼玉県のほぼ中央に位置しており、地勢はおおむね平坦で高麗川や越辺川をはじめとする豊富な水量を湛える河川によって、肥沃な耕地と居住に適した環境が整えられました。そのため、約1万5千年前から人々が生活を営み、大地に刻まれた様々な証が私たちの足もとに眠っています。

今回報告する「新町遺跡」は、坂戸市北東部の台地上に位置する遺跡で、いずれも個人住宅の建設に先んじて記録保存の措置を講じたものであります。この遺跡内には、人間地域最大規模の前方後円墳である胴山古墳をはじめ、周辺には古代寺院である勝呂廃寺も位置しております。

今回の新町遺跡の発掘調査により、古墳時代前期の集落や古墳時代後期の古墳が調査され、土器や埴輪などが出土し貴重な調査成果を得ることができました。

このような貴重な資料は、坂戸市のみならず埼玉県内の古墳時代を理解するうえで、欠かせない文化財といえます。今後は、積極的に広く活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、報告書刊行にいたるまで地権者をはじめ、多くの関係者の方々にご協力を賜りましたことに深く感謝を申し上げます。

令和2年2月

坂戸市教育委員会

教育長 安齊敏雄

例 言

- 1 本書は、埼玉県坂戸市に所在する新町遺跡3区・4区・5区の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、新町遺跡3区・4区・5区とも個人住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として、坂戸市教育委員会が実施した。
- 3 本書に収録された各調査地の所在地と調査期間、担当者は下記の通りである。

新町遺跡3区

所 在 地：埼玉県坂戸市大字片柳地内

調査期間：平成3年2月7日～平成3年3月1日

担 当 者：北堀彰男

新町遺跡4区

所 在 地：埼玉県坂戸市大字石井地内

期 間：平成9年5月7日～平成9年6月17日

担 当 者：柳楽理

新町遺跡5区

所 在 地：埼玉県坂戸市大字石井地内

調査期間：平成16年9月13日～平成16年10月29日

担 当 者：柳楽理

- 4 整理等作業は加藤恭弘（坂戸市教育委員会、平成29年度当時）、報告書刊行作業は藤野一之（坂戸市教育委員会）が担当し、遺物実測・図版作成、報告書刊行作業については、株式会社シン技術コンサルに委託した。整理作業期間は、下記の通りである。

整 理 等 作 業：平成29年12月8日～平成30年3月15日

報 告 書 刊 行 作 業：令和元年7月24日～令和2年2月21日

- 5 本書の編集は藤野、小林朋恵（株式会社シン技術コンサル）が、執筆はⅠ、Ⅱ、Ⅲ-1を藤野が、それ以外を小林が担当した。
- 6 発掘調査における3区・4区の基準点測量は、坂戸市教育委員会が実施した。
- 7 発掘調査における5区の基準点測量と4区・5区の空中写真撮影は、株式会社日成プランに委託した。
- 8 発掘調査資料及び出土遺物は、坂戸市教育委員会で保管している。
- 9 報告書作成にあたり、梶原 勝氏、平野寛之氏からご指導・ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

凡 例

- 1 掲載した遺構平面図・断面図の縮尺は、1/150、1/120、1/100、1/80、1/60、1/30を基本としている。いずれの場合も挿図中にスケールを付してある。
- 2 遺物出土地点の遺物番号は、遺物図の番号と一致する。
- 3 遺物図の縮尺は土器・埴輪は1/4、石器は1/3を基本としており、いずれの図にもスケールを付した。
- 4 遺構図および遺物図のトーンについては、下記の通りである。

遺構図： 焼土範囲・・・ 

遺物図： 赤彩範囲・・・ 

- 5 遺物観察表における凡例は、下記の通りである。
 - ・法量の単位は全て cm、重量については g で記載した。
 - ・() 内の数値は、推定値及び残存値を示す。
 - ・胎土は、肉眼で観察できるものを次のように示した。
石英=石 長石=長 海綿状骨針=針 凝灰岩=凝 片岩=片 輝石=輝 雲母=雲
角閃石=角 チャート=チ 白色砂粒=白 赤色砂粒=赤 小礫=礫
 - ・焼成は、「良好」・「普通」・「不良」の3段階に分けた。
 - ・色調は、『新版標準土色帖』2010年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色標監修）に即した。
- 6 本書に使用した地図類については、第1図を『新山古墳群3区』（坂戸市教育委員会2015）中の「第1図 埼玉県の地形」を基に作成した。第2図については、国土地理院発行1/50,000地形図『川越』・『熊谷』、第3・4・45図については坂戸市発行1/2,500『坂戸市基本図』を使用した。
- 7 調査区全体図の座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第IX系を使用した。なお、遺構平面図に記入した方位は、座標北を示す。

目次

序 例 言 凡 例 目 次

I 発掘調査の概要……………	1	III 発見された遺構と遺物……………	9
1 新町遺跡3区……………	1	1 新町遺跡・新町古墳群の概要……………	9
2 新町遺跡4区……………	1	2 新町遺跡3区……………	13
3 新町遺跡5区……………	2	3 新町遺跡4区……………	26
II 遺跡の立地と環境……………	3	4 新町遺跡5区……………	46
1 地理的環境……………	3	IV 総括……………	60
2 歴史的環境……………	3	写真図版 報告書抄録	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形……………	3	第25図 2号墳出土遺物(2)……………	31
第2図 古墳時代の主要遺跡分布図……………	6	第26図 8号墳(1)……………	34
第3図 新町遺跡位置図……………	10	第27図 8号墳(2)……………	35
第4図 新町古墳群位置図……………	11	第28図 8号墳出土遺物(1)……………	36
第5図 坂戸台地北東部における 古墳の変遷と古代寺院……………	12	第29図 8号墳出土遺物(2)……………	37
第6図 新町遺跡3区全体図……………	14	第30図 8号墳出土遺物(3)……………	38
第7図 1号住居跡……………	15	第31図 8号墳出土遺物(4)……………	39
第8図 1号住居跡炉……………	16	第32図 8号墳出土遺物(5)……………	40
第9図 1号住居跡出土遺物……………	16	第33図 8号墳出土遺物(6)……………	41
第10図 2号住居跡……………	18	第34図 新町遺跡5区全体図……………	47
第11図 2号住居跡炉、1・2号貯蔵穴……………	19	第35図 1・2号井戸……………	48
第12図 2号住居跡出土遺物……………	20	第36図 1～3号土坑……………	49
第13図 3号住居跡……………	21	第37図 4～6号土坑……………	50
第14図 3号住居跡炉……………	22	第38図 7・9・10号土坑……………	51
第15図 3号住居跡出土遺物……………	22	第39図 8・11号土坑・11号土坑出土遺物……………	52
第16図 1号土坑・同出土遺物……………	23	第40図 1～20号ピット……………	53
第17図 2～4号土坑……………	24	第41図 1～9号ピット……………	54
第18図 1号が跡……………	25	第42図 1号溝(1)……………	57
第19図 1号溝……………	25	第43図 1号溝(2)・同出土遺物……………	58
第20図 3区遺構外出土遺物……………	26	第44図 3区出土土器一覽……………	60
第21図 新町遺跡4区全体図……………	27	第45図 4区と新町古墳群……………	61
第22図 2号墳(1)……………	28	第46図 4区出土埴輪一覽……………	62
第23図 2号墳(2)……………	29	第47図 新町古墳群円筒埴輪棺……………	63
第24図 2号墳出土遺物(1)……………	30	第48図 5区の溝に区画された遺構群 と中世の遺物……………	64

挿表目次

第1表	主要遺跡一覧表	7	第7表	3区遺構外出土遺物観察表	26
第2表	新町古墳群一覧表	9	第8表	2号墳出土遺物観察表	31
第3表	1号住居跡出土遺物観察表	16	第9表	8号墳出土遺物観察表	42
第4表	2号住居跡出土遺物観察表	20	第10表	11号土坑出土遺物観察表	52
第5表	3号住居跡出土遺物観察表	22	第11表	1号溝出土遺物観察表	59
第6表	1号土坑出土遺物観察表	23			

写真目次

図版1	1 3区調査区全景	図版11	1 8号墳遺物出土状況
	2 1号住居跡		2 8号墳遺物出土状況
図版2	1 1号住居跡P-2	図版12	1 5区遠景
	2 1号住居跡遺物出土状況		2 5区調査区全景
図版3	1 1号住居跡遺物出土状況	図版13	1 1号溝
	2 1号住居跡遺物出土状況		2 1号溝
図版4	1 2号住居跡	図版14	1 1号溝遺物出土状況
	2 3号住居跡		2 1号溝遺物出土状況
図版5	1 1号土坑	図版15	1号住居跡出土遺物
	2 2号土坑		2号住居跡出土遺物
図版6	1 3号土坑	図版16	3号住居跡出土遺物
	2 1号炉跡		2号墳出土遺物
図版7	1 4区遠景	図版17	8号墳(1)出土遺物
	2 4区調査区全景	図版18	8号墳(2)出土遺物
図版8	1 2号墳	図版19	8号墳(3)出土遺物
	2 2号墳		11号土坑出土遺物
図版9	1 2号墳遺物出土状況		1号溝出土遺物
	2 2号墳遺物出土状況		
図版10	1 8号墳		
	2 8号墳		

I 発掘調査の概要

1 新町遺跡3区

(1) 発掘調査に至る経過

平成2年12月、坂戸市大字片柳地内での個人住宅建設に伴い、事業者から坂戸市役所の担当部署へ開発行為許可申請が提出された。

開発予定地内は当初、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが市教育委員会は平成3年2月5日・6日にかけて試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居跡等が確認され埋蔵文化財の所在が明らかとなった。このため、隣接する新町遺跡の範囲に変更が生じたため、平成3年2月12日付け坂教社発第65号で埼玉県教育委員会教育長あて埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カード(変更増補)を提出した。

その後、市教育委員会と原因者側とで埋蔵文化財の保存について協議を進めたが、遺跡の現状保存は不可能であると判断された。そのため、市教育委員会が調査主体となり事前に記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査の実施にあたり、平成3年2月12日付け坂教社発第66号で埋蔵文化財発掘の届出を埼玉県教育委員会教育長あてへ進達した。これに対し、埼玉県教育委員会からは平成3年2月18日付け教文第3-300号で指示通知を受けた。また、埋蔵文化財発掘調査の通知は平成3年2月12日付け坂教社発第67号で埼玉県教育委員会教育長あてへ通知した。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は平成3年2月7日から同年3月1日にかけて以下のとおり実施した。

- 2月7日(木) 調査区の精査を行い、竪穴住居跡、土坑を検出。
- 2月8日(金) 竪穴住居跡の掘り下げを開始。
- 2月19日(火) 土坑の掘り下げを開始。
- 2月21日(木) 1・3号住居跡の生活面写真撮影、1・2・3号住居跡の平面図作成。
- 2月26日(火) 2号住居跡の生活面写真撮影、

調査区全景写真撮影。

2月28日(木) 重機を用いて調査区の埋め戻しを開始。

3月1日(金) 調査区の埋め戻し完了し、発掘作業終了。

(3) 発掘調査の方法

遺構平面図及び遺物取り上げは、原則として平板を用いて作図した。遺構断面図は1/20で作図し、炉及び炉跡は平面図・断面図とも1/10で作図した。遺構写真は、35mmモノクロームフィルム・カラーポジフィルム・ネガカラーフィルムを用いて撮影した。

2 新町遺跡4区

(1) 発掘調査に至る経過

平成9年4月23日、新町遺跡内の坂戸市大字石井地内での個人住宅建設に伴い、事業者より開発予定地内にかかる埋蔵文化財の有無について市教育委員会に照会を受けた。

開発予定地内の周辺には古墳が多く分布している可能性があるため、市教育委員会は平成9年4月30日・5月1日にかけて試掘調査を実施した。その結果、新町2号墳及び8号墳の周溝と考えられる遺構が確認され、埋蔵文化財の所在が明らかとなった。

その後、市教育委員会と原因者側とで埋蔵文化財の保存について協議を進めたが、遺跡の現状保存は不可能であると判断された。そのため、市教育委員会が調査主体となり事前に記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査の実施にあたり、平成9年5月14日付け坂教社発第233号で埋蔵文化財発掘の届出を埼玉県教育委員会教育長あてへ進達した。これに対し、埼玉県教育委員会からは平成9年6月2日付け教文第3-149号で指示通知を受けた。

また、埋蔵文化財発掘調査の報告は平成9年5月14日付け坂教社発第235号で埼玉県教育委員会教育長あてへ報告した。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は平成9年5月7日から同年6月17日にかけて以下のとおり実施した。

- 5月7日(水) 重機を用いて調査区の表土除去を開始。
- 5月12日(月) 調査区の精査を行い、古墳の周溝を検出。
- 5月13日(火) 2・8号墳の周溝の掘り下げを進める。
- 5月22日(木) 2号墳周溝の土層断面図作成。
- 5月29日(木) 8号墳遺物出土状況の写真撮影。
- 6月4日(水) 8号墳周溝の土層断面図作成。
- 6月10日(火) 調査区の空撮。
- 6月12日(木) 2・8号墳の平面図作成。
- 6月16日(月) 重機を用いて調査区の埋め戻しを開始。
- 6月17日(火) 調査区の埋め戻しが完了し、発掘作業終了。

(3) 発掘調査の方法

遺構平面図及び遺物取り上げは、原則として平板を用いたが、ラジコンヘリによる写真測量も併用した。遺構断面図は1/20で作図し、遺構写真は35mmモノクロームフィルム・カラーポジフィルム・ネガカラーフィルムを用いて撮影した。

3 新町遺跡5区

(1) 発掘調査に至る経過

平成16年8月3日、新町遺跡内の坂戸市大字石井地内での個人住宅建設に伴い、事業者より開発予定地内にかかる埋蔵文化財の有無と取り扱いについて市教育委員会に照会文書が提出された。

開発予定地内の周辺には古墳が多く分布している可能性があるため、市教育委員会は平成16年8月25日に試掘調査を実施した。その結果、溝と考えられる遺構が確認され、埋蔵文化財の所在

が明らかとなった。

その後、市教育委員会と原因者側とで埋蔵文化財の保存について協議を進めたが、遺跡の現状保存は不可能であると判断された。そのため、市教育委員会が調査主体となり事前に記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査の実施にあたり、平成16年9月15日付け坂教社発第392号で埋蔵文化財発掘の届出を埼玉県教育委員会教育長あてへ進達した。これに対し、埼玉県教育委員会からは平成16年10月5日付け教文第3-550号で指示通知を受けた。また、埋蔵文化財発掘調査の通知は平成16年9月15日付け坂教社発第394号で埼玉県教育委員会教育長あてへ通知した。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は平成16年9月13日から同年10月29日にかけて以下のとおり実施した。

- 9月13日(月) 重機を用いて調査区の表土除去を開始。
- 9月15日(水) 調査区の精査を行い、溝・土坑等を検出。
- 9月16日(木) 1号溝・土坑の掘り下げを進める。
- 10月15日(金) 1号溝の土層断面図作成開始。
- 10月22日(金) 1号溝の平面図作成。
- 10月26日(火) 調査区の空撮。
- 10月27日(水) 重機を用いて調査区の埋め戻しを開始。
- 10月29日(金) 調査区の埋め戻しが完了し、発掘作業終了。

(3) 発掘調査の方法

遺構平面図及び遺物取り上げは、原則としてトータルステーションを使用した。遺構断面図は1/20で作図し、遺構写真は35mmモノクロームフィルム・カラーポジフィルム・ネガカラーフィルムを用いて撮影した。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

坂戸市は埼玉県の中央部よりやや南に位置し、市域の大部分が入間台地上にあるため比較的平坦で起伏の少ない地形である（第1図）。坂戸市周辺の地形は、低地、自然堤防、台地、丘陵に大きく分けられ、西側に外秩父山地を臨む。市内の北側及び東側には、越辺川によって形成された低地が広がり、現在でも水田として利用されている。また、この越辺川が鳩山町・東松山市・川島町との境となっている。

入間台地は、入間川・越辺川・高麗川によって形成された扇状地性の台地であり、毛呂台地・坂戸台地・飯能台地に区分される。坂戸台地は高麗

川以東に広がる台地であり、坂戸市域では飯盛川や谷治川、大谷川などによって開折されるが、起伏は少ない。一方、毛呂台地は高麗川と越辺川に挟まれており、西側は毛呂山丘陵や外秩父山地と接し、坂戸台地に比べ面積は狭い。台地のほぼ中央には葛川が流れており、坂戸市域では馬の背状の台地となる。坂戸市以北では、越辺川と都幾川に挟まれた高坂台地、都幾川と市野川に挟まれた東松山台地が形成されている。

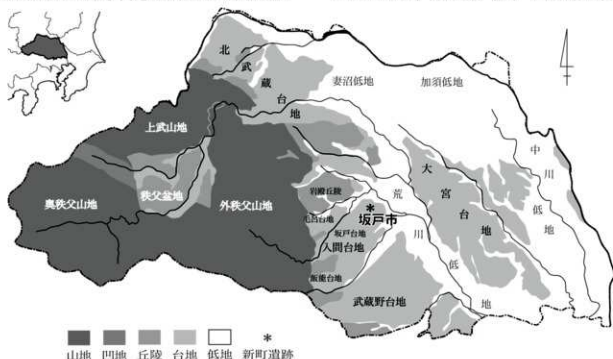
また、毛呂台地の南西側に毛呂山丘陵、高坂台地の西側に岩殿丘陵、東松山台地の北側に比企丘陵が位置する。

2 歴史的環境

以下、本書で報告する遺跡に関係する古墳時代を中心とした坂戸市周辺の主要遺跡について記す（第2図）。

弥生時代後期 坂戸市内では、弥生時代後期の遺跡は限定的である。高麗川左岸の毛呂台地周辺で

は、下田遺跡（1）や三福寺遺跡（13）などで集落が発見されており吉ヶ谷式土器が出土している。高麗川右岸の坂戸台地では、花影遺跡（20）や柘遺跡（24）、附島遺跡（32）で集落が形成されているほか、宮裏遺跡（20）でも集落が確認



第1図 埼玉県の地形

され南関東系の弥生土器が出土している。

古墳時代前期 上記のように坂戸市内では、弥生時代の遺跡は少なく台地緑辺に集落や方形周溝墓が形成される。一方、古墳時代前期になると、遺跡は急増する傾向が看取される。

集落 毛呂台地周辺では、台地緑辺の三福寺遺跡や大河原遺跡(14)、長岡遺跡(18)などで集落が形成される一方、中耕遺跡(5)や稲荷前遺跡(10)などでも集落が認められるため、古墳時代前期になり低地の開発が本格的に開始されたと考えられる。高麗川右岸の坂戸台地でも、台地緑辺に集落が営まれる傾向がある。宮裏遺跡や花影遺跡、勝呂遺跡(26)、附島遺跡、木曾免遺跡(34)などで集落が確認されている。また、第2図の範囲外であるが景台遺跡(35)の東側に位置する高窪遺跡では、竪穴住居跡から受口状口縁を呈する近江系の小型甕が出土しており注目される。

越辺川以北の高坂台地や東松山台地では、駒堀遺跡(38)や大西遺跡(42)、下道添遺跡(50)、五領遺跡(56)などが、都幾川右岸の低地には反町遺跡(46)が形成される。特に五領遺跡や反町遺跡は大規模かつ拠点的な集落と考えられ、様々な地域の土器が出土するほか、反町遺跡では玉作工房の存在も明らかとなっている。

墳墓 毛呂台地や坂戸台地では、墓制はもっぱら弥生時代以来の方形周溝墓を採用し、現在確認できる前期古墳は二重口縁壺などが出土した天王山古墳群(W)1号墳の1基のみである。毛呂台地では、中耕遺跡や広面B遺跡(6)、稲荷前遺跡などで大規模な方形周溝墓群が発見されている。なかでも、中耕遺跡と広面B遺跡からは前方後方形と考えられる周溝墓が検出されており注目される。古墳時代前期における当地域では、台地緑辺に集落が、低地に墓域という土地利用が看取できる。

坂戸台地では、集落と同様に宮裏遺跡や花影遺跡で方形周溝墓が検出されており、宮裏遺跡では底部焼成前穿孔の二重口縁壺や勾玉・管玉・小玉などが出土している。また、五反田遺跡(33)や木曾免遺跡をはじめ坂戸台地の北側から東側にかけての台地緑辺にも方形周溝墓群が形成されて

いる。

一方、東松山市周辺では、方形周溝墓とともに前期古墳も築造される地域である。前方後方墳としては、高坂8号墳(AB)や諏訪山29号墳(AD)、根岸稲荷神社古墳(AF)、山の根古墳(AW)など狭い範囲に集中している。高坂8号墳は、後方は消滅しているものの前方部は近年発掘調査が行われ、埋葬施設から装身具や振文鏡などが出土している。さらに、高坂8号墳の周辺から三角縁陳氏作四神二獣鏡が発見されており、今後その解釈について検討する必要がある。

また、前方後円墳である野本將軍塚古墳(AH)の築造時期については諸説あるが、前期古墳であれば五領遺跡や反町遺跡との関連が想起される。

古墳時代中期前半 古墳時代前期に形成された集落は、中期前半になると衰退し坂戸市周辺では、岩殿丘陵東端の駒堀遺跡や範囲外であるが毛呂台地上に位置する矢島遺跡など限定的になるのが特徴で、坂戸市内では中期前半の遺跡は非常に希薄である。また、都幾川右岸の低地に立地する城敷遺跡(45)からは、直接遺構に伴わないが陶器、甕などが一定量出土していることが特筆される。中期前半は集落が少ないが、中期後半になると再び集落や古墳が形成されるようになる。

古墳時代中期後半～終末期

集落 毛呂台地周辺で5世紀後半頃から出現する集落としては、桑原遺跡(7)や低地に位置する棚田遺跡(9)が存在するが、短期間で終焉するようであり古代までは続かない。高麗川右岸の坂戸台地では、附島遺跡や上谷遺跡(36)などでも古墳時代前期で途絶えた集落の造営がこの段階から再び開始される。越辺川以北では、低地の城敷遺跡で大規模な集落が形成される他、岩殿丘陵の先端に立地する舞台遺跡(ウ)でも集落が確認できる。これらの遺跡に共通する要素として、出土する土器器環が北武蔵地域で採用された定型化した須恵器環蓋模倣環ではなく、内外面に赤彩を施す環などを使用する。この赤彩は環に限らず、埴や鉢・高杯・壺・甕など多器種に及び、模倣環とは異なる一つの土器器文化圏を展開する。赤彩

を施すことに執着する土師器群は、形態を変化させながら8世紀前半まで継続することから、中武蔵地域を象徴する土器様式といえよう。

古墳時代後期になると、集落は増加する傾向にあり、毛呂台地周辺では西浦遺跡(12)や塚の越遺跡(15)、長岡遺跡、大河原遺跡などの台地縁辺や低地の沼端遺跡(11)などで集落が出現するが、点的に存在するようである。7世紀に入ると、稲荷前遺跡や足洗遺跡(2)、金井遺跡(3)、長岡遺跡を中心に集落が展開し、古代にかけて連続と続くのが特徴である。下田遺跡も7世紀前後から出現する集落であるが、8世紀前半には終焉するようである。高麗川右岸の坂戸台地では、上谷遺跡で集落が継続し勝呂遺跡や新田前遺跡(31)、宮ノ前遺跡(22)など台地縁辺に集落が展開する傾向にある。越田川以北の高坂台地では大西遺跡や下寺前遺跡(43)などで集落が確認され、7世紀以降は低地の銭塚遺跡(47)や岩殿丘陵の先端に位置する立野遺跡(39)、大塚原遺跡(40)でも集落が展開する。特に、立野遺跡からは7世紀後半代に位置づけられる金属器模倣の須恵器高台埴や盤などが多く出土している。

古墳 坂戸市内における本格的な古墳の築造は、中期後半頃から始まる。

中期後半 中期中葉から後半に群集墳の築造が開始されるのは、毛呂台地では三福寺古墳群(B)や隣接する大河原古墳群(D)、善能寺古墳群(G)などがあげられる。

坂戸台地では、牛塚山古墳群(V)や浅野野古墳群(J)で古墳の築造が始まるが、毛呂台地に比べて古墳数は少ない。下坂古墳群(X)に含まれるどうまん塚古墳からは、豊富な副葬品が出土しており、ほぼ同時期に集落が形成される上谷遺跡との関係が想定される。また、大河原古墳群や牛塚山古墳群では中期後半で古墳の築造が停止し、後期には引き継がれないのが特徴である。

埴輪は三福寺古墳群や善能寺古墳群、牛塚山古墳群で出土しているが、大河原古墳群では埴輪の樹立は認められず、古墳群によって異なる様相が認められる。

高坂台地や東松山台地では、前期古墳が立地する諏訪山古墳群(AC)でB種ヨコハケの円筒埴輪が出土しており、代正寺遺跡(44)や下道添遺跡、柏崎古墳群(AI)、東耕地古墳群(AP)などでも中期古墳が築造されている。

なお、比企・入間地域における古墳時代中期の有力古墳は、柏崎古墳群内に位置する全長62mの帆立貝形古墳のおくま山古墳(AJ)であり、それ以外に前方後円墳は確認されていない。

後期 毛呂台地では、北峰古墳群(C)や三福寺古墳群、苦林古墳群(H)で古墳が確認されている。なかでも、苦林古墳群は5基の前方後円墳を含む54基の古墳が密集する古墳群であり、北側に展開する集落の長岡遺跡と密接に関係していたと推測される。なお、毛呂台地における前方後円墳は苦林古墳群以外では三福寺2号墳の1基のみである。

坂戸台地では、下坂古墳群で古墳の築造が継続するほか、雷電塚古墳群(T)、勝呂古墳群(Q)、新町古墳群(O)で古墳が築造される。前方後円墳は下坂古墳群、雷電塚古墳群、新町古墳群で各1基ずつ築造されている。

埴輪を樹立する古墳は多く、円筒埴輪をはじめ人物埴輪や馬形埴輪などが出土している。雷電塚古墳群や北峰古墳群では、桜山窯跡群(エ)で生産された埴輪が供給されており、苦林古墳群では鴻巣市生出塚埴輪窯跡産の可能性のある円筒埴輪が出土している。

高坂台地や東松山台地では、若宮八幡古墳(AN)や冢塚古墳(AO)、かぶと塚古墳(AV)で切石積の横穴式石室が構築され、当地域におけるその後の横穴式石室に多大な影響を与えることになる。

終末期 毛呂台地や坂戸台地における横穴式石室の採用時期は判然としませんが、7世紀になると普及するようである。毛呂台地では、北峰古墳群や善能寺古墳群、苦林古墳群で古墳の築造が継続し、大河原古墳群では中期後半に途絶えた古墳の築造が再開される。また、成願寺古墳群(E)では新たに古墳群が形成される。

坂戸台地では、下坂古墳群や勝呂古墳群、新



第2図 古墳時代の主要遺跡分布図

町古墳群で引き続き古墳の築造が行われ、新山古墳群(L)や片柳古墳群(N)、塚越古墳群(S)は終末期になってから形成される群集墳である。

坂戸市内で確認されている横穴式石室の石室構造は、凝灰質砂岩切石積と川原石積に大きく分かれる。玄室(後室)形態は、胴張りを呈するものと直線胴のものが認められ、単室構造や複室構造など多様な在り方を示している。

また、石上神社古墳(F)や土屋神社古墳(K)、勝呂神社古墳(R)、小堤山古墳(Y)は、直径50m程度的大型円墳である。このほか、近年調査が行われた新山2号墳(M)や範囲外であるが鶴ヶ丘稲荷神社古墳は一辺50m程度の方墳、山王塚古墳は上円下方墳である。詳細な築造時期は判然としないが、いずれも7世紀代の築造と考えられ前方後円墳消滅後の有力古墳と推測され

る。石上神社古墳は毛呂台地の東端に位置し、北側に展開する集落との関係が注目される。高麗川の対岸には、石上神社古墳と対峙するように土屋神社古墳が突如として出現するが、この周辺は古墳時代前期を中心とする方形周溝墓群や集落であり、6・7世紀代の集落や古墳は皆無に等しい。勝呂神社古墳は、坂戸台地北側の緑辺に立地し北西側には勝呂廃寺(26)が位置している。

このように入間地域北部では、南北9km、東西7kmの範囲に終末期の大型古墳が集中する特異な地域であると評価できる。

窯跡・寺院 比企地域では、古墳時代から窯業生産も行われており、城輪窯跡は岩殿丘陵東端の桜山窯跡群や吉見丘陵南端の和名窯跡群(オ)で発見されている。岩殿丘陵における須恵器生産は、消費地出土資料を参考にするとTK47型式頃か

第1表 主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
A	入西石塚古墳	AD	諏訪山29号墳	10	稲荷前遺跡	39	立野遺跡
B	三福寺古墳群	AE	古瀬古墳群	11	沼端遺跡	40	大塚原遺跡
C	北峰古墳群	AF	根岸稲荷神社古墳	12	西浦遺跡	41	田木山遺跡
D	大河原古墳群	AG	野本古墳群	13	三福寺遺跡	42	大西遺跡
E	成願寺古墳群	AH	野本將軍塚古墳	14	大河原遺跡	43	下寺前遺跡
F	石上神社古墳	AI	柏崎古墳群	15	塚の越遺跡	44	代正寺遺跡
G	善徳寺古墳群	AJ	おくま山古墳	16	稲荷森遺跡	45	城敷遺跡
H	善林古墳群	AK	権現塚古墳	17	花見塚遺跡	46	反町遺跡
I	十郎横穴墓群	AL	附川古墳群	18	長岡遺跡	47	銭塚遺跡
J	浅野古墳群	AM	下唐子古墳群	19	赤沼高在家遺跡	48	古瀬・根岸裏遺跡
K	土屋神社古墳	AN	若宮八幡古墳	20	花影・宮裏遺跡	49	下山遺跡
L	新山古墳群	AO	曹塚古墳	21	上山田遺跡	50	下道添遺跡
M	新山2号墳	AP	東耕地古墳群	22	宮ノ前遺跡	51	番清水遺跡
N	片柳古墳群	AQ	岩轟古墳群	23	勇馬寺遺跡	52	山王裏遺跡
O	新町古墳群	AR	羽黒山古墳群	24	袴遺跡	53	西浦遺跡
P	彌山古墳	AS	吉見百穴横穴墓群	25	前原遺跡	54	西谷見桑里Ⅱ遺跡
Q	勝呂古墳群	AT	岩粉山横穴墓群	26	勝呂廃寺・勝呂遺跡	55	三ノ耕地遺跡
R	勝呂神社古墳	AU	久米田古墳群	27	道場遺跡	56	五領遺跡
S	塚越古墳群	AV	かぶと塚古墳	28	馬場遺跡	57	観音寺遺跡
T	雷電塚古墳群	AW	山の根古墳	29	町東遺跡	58	岩鼻遺跡
U	雷電塚1号墳	1	下田遺跡	30	宮廻館跡	59	附川遺跡
V	牛塚山古墳群	2	足洗遺跡	31	新田前遺跡	ア	西谷ッ遺跡
W	天王山古墳群	3	金井遺跡	32	附島遺跡	イ	根平遺跡
X	下小坂古墳群	4	内出遺跡	33	五反田遺跡	ウ	舞台遺跡
Y	小堤山神古墳	5	中耕遺跡	34	木曾免遺跡	エ	極山窯跡群
Z	毛塚古墳群	6	広面B遺跡	35	景台遺跡	オ	和名窯跡群
AA	高坂古墳群	7	桑原遺跡	36	上谷遺跡		
AB	高坂8号墳	8	田島遺跡	37	西窪遺跡		
AC	諏訪山古墳群	9	櫻田遺跡	38	駒塚遺跡		

ら開始されると考えられるが、窯跡は発見されていない。古墳時代の須恵器窯跡は丘陵東側に築窯される傾向にあり、調査されている窯跡の中で最も古い段階の窯跡は、桜山窯跡群であり6世紀前半の窯跡が2基調査されている。舞台遺跡では、窯跡は発見されていないが6世紀後半の在産須恵器が出土しており、北関東型系譜の技術で生産を行っていたと考えられる。その後は、7世紀前半の根平遺跡(イ)、7世紀中葉～後半の舞台遺跡C-1・2号窯跡で須恵器生産が行われるが、いずれも単発的な操業であった可能性が高い。また、坂戸台地では西谷ツ窯跡(ア)が7世紀前半に開窯するが、1基単独の単発窯と考えられる。

一方、7世紀後半になると新たな動きが看取される。範囲外であるが、それまで窯跡が築窯されなかった岩殿丘陵内部の鳩山町域に、石田窯跡や

赤沼古代瓦窯跡が成立し、赤沼古代瓦窯跡で生産された瓦は勝呂廃寺や小用廃寺へ供給されている。勝呂廃寺は坂戸台地北側の縁辺に位置し、7世紀末頃には創建されていたと考えられる。小用廃寺の建立は勝呂廃寺とほぼ同時期と考えられているが、詳細は不明である。

古代道路 近年、坂戸市内で馬場遺跡(28)や町東遺跡(29)で南北方向に走行する幅約11mの道路跡が確認された。この道路跡は、側溝の特徴や出土遺物などから東山道武蔵路の可能性が非常に高く、勝呂廃寺や勝呂神社古墳の東側を通過するルートとなる。

また、吉見町においても西吉見条里II遺跡(54)や三ノ耕地遺跡(55)などでも古代道路が発見されており、東山道武蔵路とどのような関係があるか注視する必要がある。

Ⅲ 発見された遺構と遺物

1 新町遺跡・新町古墳群の概要

新町遺跡と新町古墳群は、坂戸市北東部に位置し北に飯盛川や越辺川を臨む坂戸台地縁辺に立地している。標高は、約 18.5～25.7 m を測る。

新町遺跡では、これまでに 7 か所の発掘調査が行われており（第 3 図）、1 区・2 区は発掘調査報告書が刊行されている。

1 区・2 区は新町遺跡の北側のやや標高が低い場所に位置し、1 区では弥生時代の竪穴住居跡が 1 軒検出されている。2 区では、掘り込みの浅い溝が 1 条検出され埴輪片なども出土しているが、古墳の周溝となるかは不明である。また、本書で報告する 3 区では古墳時代前期の竪穴住居跡が

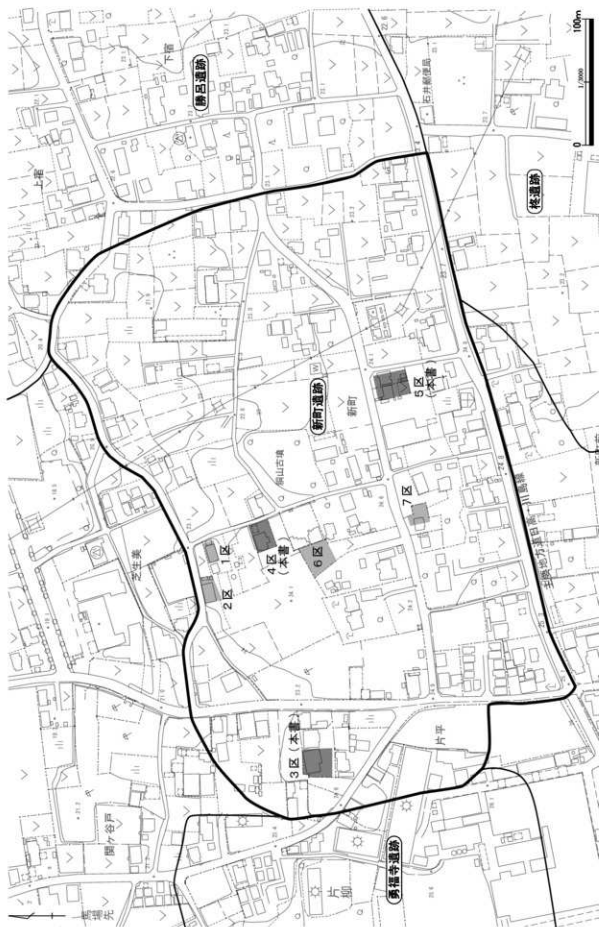
検出されているため、新町古墳群の築造以前は台地縁辺が集落として利用されていたことが分かる。

新町古墳群は、古墳分布調査やこれまでの発掘調査によって前方後円墳 1 基、円墳 10 基の合計 11 基の古墳が確認されている（第 4 図・第 2 表）。特に駒山古墳（新町 1 号墳）は、全長 67 m、前方部幅 40 m、後円部径 35 m、墳丘高 7 m を測り 2 段築成の大型の前方後円墳である。この規模の前方後円墳は、入間地域で最大規模であるため、当地域の古墳時代を考えるうえで非常に重要な位置を占める（第 5 図）。しかし、詳細な発掘

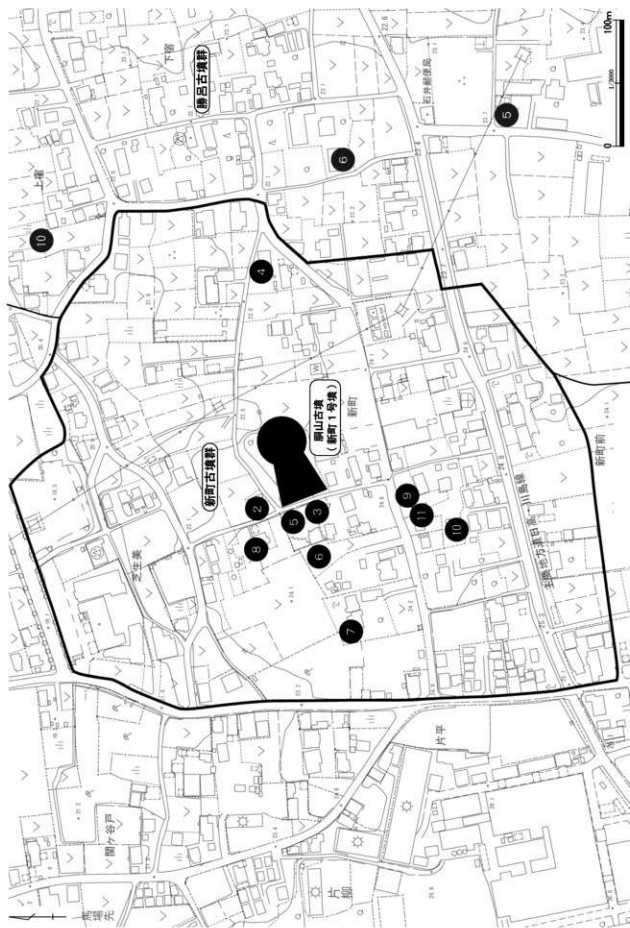
第 2 表 新町古墳群一覧表

古墳名	概 要	参考文献
1 号墳	通称「駒山古墳」。前方後円墳。墳丘は現存し、全長 67 m、前方部幅 40 m、後円部径 35 m、墳丘高 7 m を測る。後期後半の築造と考えられ、入間地域で最大規模の前方後円墳。	市史
2 号墳	円墳。直径 16 m、墳丘高 1.3 m を測るが、墳丘は消滅。新町遺跡 4 区において、周溝の一部を調査、円筒埴輪、形象埴輪、須恵器甕などが出土。	本書 市史
3 号墳	円墳。直径 10 m、墳丘高 0.4 m を測るが、墳丘は消滅。	市史
4 号墳	円墳。直径 11 m、墳丘高 1.7 m を測るが、墳丘は消滅。	市史
5 号墳	円墳。直径 12 m、墳丘高 1 m を測るが、墳丘は消滅。	市史
6 号墳	円墳。新町遺跡 6 区において記録保存後、消滅。直径約 17 m、墳丘高 1.5 m を測る。埋葬施設は、川原石積の横穴式石室と考えられ、床面下は版築が認められた。周溝は、幅 4 m、深さ 1.2 m を測る。	市史 年報 H19
7 号墳	円墳。直径 6 m、墳丘高 1.4 m を測るが墳丘は消滅。横穴式石室墳と考えられる。	市史
8 号墳	円墳。直径 17 m、墳丘高 3.4 m を測るが、昭和 40 年に墳丘の一部を調査し墳丘は消滅。新町遺跡 4 区において、周溝の一部を調査、円筒埴輪、須恵器甕などが出土。	本書 市史
9 号墳	円墳。墳丘は現存し、かつては直径 15 m、墳丘高 2.5 m を測る。昭和 34 年に横穴式石室の調査を実施、石室は川原石積で胴張を呈する。石室内からは耳環、鉄鏃、刀子が出土。新町遺跡 7 区において、周溝の一部を調査、長頸甕、鉄刀、須恵器高坏・提瓶などが出土。	市史 県史 年報 H19
10 号墳	通称「太子塚」。方墳か。墳丘は現存し、南北 27 m、東西 24 m、墳丘高 2.2 m を測る。	市史
11 号墳	円墳か。墳丘は現存せず、新町遺跡 7 区において新たに発見され周溝の一部を調査。	

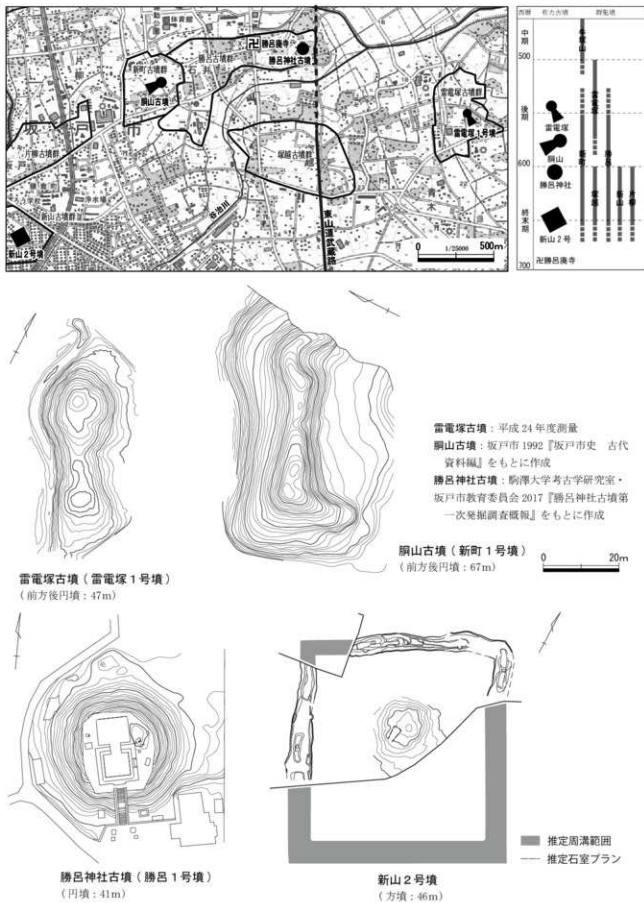
※市史：坂戸市 1992『坂戸市史』古代資料編
 県史：埼玉県 1982『埼玉県史』資料編 2
 年報：理文さかど年報



第3図 新町遺跡位置図



第4図 新町古墳群位置図



第5図 坂戸台地北東部における古墳の変遷と古代寺院

調査を行っていないため、築造時期を断定することができず、現段階では古墳時代後期後半の築造と推測されている。

新町古墳群内では、これまでに複数回の発掘調査が行われている。なかでも9号墳は昭和34年3月に道路拡幅工事の際に横穴式石室の発掘調査を実施しており、この調査が坂戸市内で初めての本格的な調査であったとされている。また、駒山古墳についても昭和61年に後円部北東側の周溝の一部を発掘調査しており、周溝の幅は11mとされ埴輪の出土は認められなかった。なお、昭和34年12月には駒山古墳の北西側の畑地から埴輪棺墓が不時発見されており、3条4段構成の円筒埴輪2点、2条3段構成の円筒埴輪1点などが歴史民俗資料館に収蔵されている。

その後、新町遺跡4区で2号墳と8号墳の周溝の一部、6区で6号墳の埴丘・横穴式石室・周溝、7区で9号墳と11号墳の周溝の一部が調査されている。6号墳は、6区の発掘調査時に川原石積石室、9号墳も胸張りを呈する川原石積石室が発見されており、いずれも終末期古墳と考えられる。特に9号墳からは、横穴式石室内から耳環、鉄鏃、刀子が出土したほか、周溝内から長頸鏃束(50～60本)が1束と鉄刀などが出土したことは特筆される。7号墳は発掘調査が行われていな

いが、過去に埴丘が崩された際に埴輪の出土はないものの鏃が発見されたことから、終末期の横穴式石室の可能性が高い。10号墳も発掘調査が行われていないが、方墳である可能性を積極的に評価すると終末期古墳の可能性が考えられる。一方、本書で報告するとおり2号墳は過去に埴丘を崩した際に石片が発見されたと伝えられ、4区の発掘調査では周溝内から埴輪が出土し、8号墳の周溝内からも円筒埴輪が多く出土していることから、後期後半に位置づけられる。なお、3・4・5号墳については築造時期は不明である。

以上のことをまとめると、新町古墳群は古墳時代後期後半に駒山古墳や2・8号墳が築造され、終末期になっても6・7・9・10号墳などの古墳の築造が継続したものと考えられる。なお、当地域の終末期古墳の横穴式石室には、川原石積石室と凝灰質砂岩切石積石室などが認められるが、新町古墳群ではいずれも川原石積石室が採用されている。

新町古墳群の形成後、新町遺跡内では奈良・平安時代の集落は見発見されておらず、中世以降になって土地の利用が明瞭されるようである。また、新町古墳群に対応する集落も特定されておらず、今後の課題である。

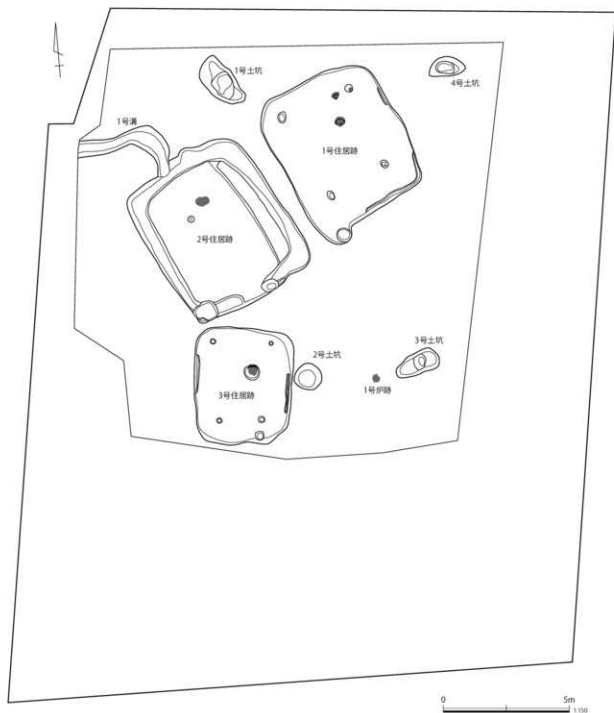
2 新町遺跡3区

(1) 新町遺跡3区の概要

新町遺跡3区は遺跡範囲のほぼ西端に位置し、勇福寺遺跡に近接する(第3図)。調査は個人住宅建設に伴い、平成3年2月7日から同年3月1日まで実施された。調査面積は約244m²、標高は現況の地表面で25m前後を測り、確認面はローム上面である。

調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居跡3軒(1～3号住居跡)と時期不明の土坑4基(1～4号土坑)、炉跡1基(1号炉跡)、溝1条(1号溝)が検出された(第6図)。住居跡同士は重複せずに分布しており、平面形状は全て長方形である。調査区中央部から北部に位置する1・2号住居跡

は主軸方向が25度西へ、調査区南部に位置する3号住居跡は7度東へそれぞれ傾く。土坑は調査区北部に2基(1・4号土坑)、南部に2基(2・3号土坑)それぞれ分布する。1号炉跡は調査区南東部、2号土坑と3号土坑の間に位置する。1号溝は調査区西端から東へ走行し、2号住居跡の北部で南方向へ屈曲するが同住居跡範囲以南では確認できなかった。



第6図 新町遺跡3区全体図

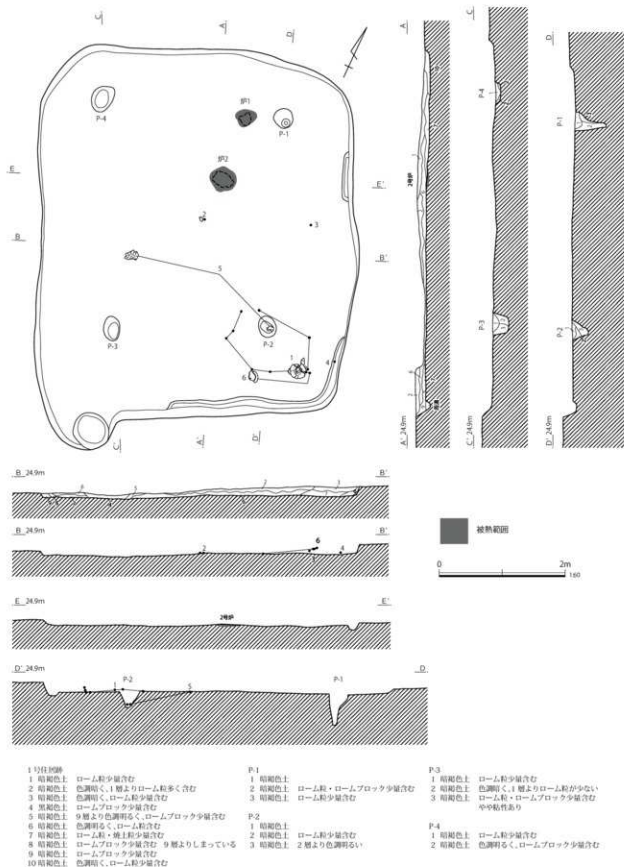
(2) 竪穴住居跡

1号住居跡 (第6～9図 図版1～3・15)

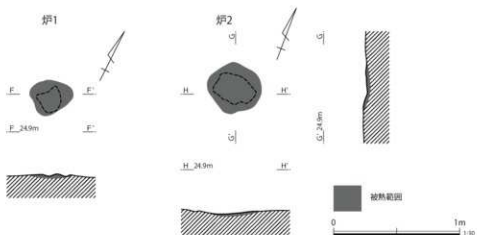
3区の北部に位置し、南西側に2号住居跡が隣接する。主軸方向は、西壁を基準とするとN-25°-Wである。平面形状は長方形であり、南西隅が南方に0.45m程度突出する。検出され

た規模は長軸(北-南)5.84m、短軸(東-西)5.05mを測る。壁は斜めに立ち上がり、最大高は0.15mを測る。

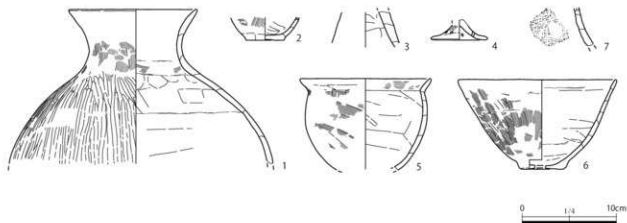
覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で10層に分層される。床面はほぼ平坦であり、東壁と南壁面に沿って断続的に壁溝がある。



第7図 1号住居跡



第8図 1号住居跡炉



第9図 1号住居跡出土遺物

第3表 1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	土師器 壺	口:13.4 高:(16.3)	石・長・凝 片・チ	内面:にぶい 黄橙色、外面: 橙色	良好	内外面器面摩滅、外面口縁部に横方向 の撫で、頸部に刷毛目、体部に縦方向 の磨き。内面口縁部に横方向の撫で、 頸部に刷毛目・指押さえ、体部に髷撫 で。	50%	床面	
2	土師器 壺	高:(2.4) 底:4.0	石・長・針 ・チ	内面:赤褐色 、外面:橙 色	良好	内外面器面摩滅、外面体部に刷毛目、 撫で、底部に撫で。内面に撫で。	底部 ほぼ 完存	床面	
3	土師器 台付甕	高:(3.7)	長・針・チ	黄橙色	良好	内外面器面摩滅、外面に撫で。内面に 撫で。	脚部 破片	覆土 下層	
4	土師器 高坏	脚:(6.0) 高:(2.2)	長・凝・チ	にぶい褐色	良好	透孔6ヶ所。外面に撫で後磨き、内面 に撫で。	脚部 60%	覆土 下層	
5	土師器 鉢	口:(13.7) 高:(9.7)	石・長・チ	橙色	やや 不良	内外面器面摩滅、外面口縁部に横方向 の撫で、体部に刷毛目・撫で。内面口 縁部に刷毛目、体部に髷撫で・撫で。	口縁部 60%	床面 P-2	

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
6	土師器 甗	口:16.5 底:4.7 高:9.5 孔:1.1	長・凝・チ	内面:明赤褐色、外面:黄橙色	良好	内外面器面摩擦、外面口縁部に横方向の撫で、体部に刷毛目、底部撫で、内面に撫で。底部単孔、焼成前に穿孔。	80%	床面 覆土 中層	
7	岩倉式 土器 甗	高:(4.1)	石・長・チ	橙色	良好	外面に簾状文・波状文、刷毛目。内面器面摩擦し調整不明瞭。	頸部 破片	覆土	

壁溝は幅 0.15～0.20m、深さ 0.05～0.07m を測り、断面形状は逆台形状である。掘り方はない。

炉は、北寄りの床面で 2 基(炉 1・2)検出された。炉 1 は長軸 0.34 m、短軸 0.28 m の不定形の範囲、炉 2 は径 0.42 m の円形の範囲の床面がそれぞれ被熱しており、掘り込みは認められない。

柱穴は 4 基 (P-1～4) 検出され、位置関係から全て主柱穴と考えられる。平面形状は P-1 が円形、その他は楕円形であり、断面形状は P-1・2 が V 字状、P-3・4 は逆台形状である。検出された規模は P-1 が径 0.31m、深さ 0.50m、P-2 が長軸 0.34m、短軸 0.27m、深さ 0.26m、P-3 が長軸 0.39m、短軸 0.25m、深さ 0.25m、P-4 が長軸 0.45m、短軸 0.33m、深さ 0.18m を測る。P-1 は、土層断面に柱痕跡が確認できる。

貯蔵穴は、位置的に南西隅の突出部に検出されている径 0.60m の円形の浅い掘り込みが該当する可能性があるが、確定はできない。

遺物は土師器の壺 2 点 (第 9 図 1・2)、台付甗 1 点 (第 9 図 3)、高坏 1 点 (第 9 図 4)、鉢 1 点 (第 9 図 5)、甗 1 点 (第 9 図 6)、弥生土器の壺 1 点 (第 9 図 7) を掲載した。1・2 は床面から、3・4 は覆土下層から、5 は床面と P-2 の覆土から、6 は床面と覆土中層から、7 は覆土からそれぞれ出土した。1 は口縁部から体部上半にかけて残存している大型の直口壺、2 は体部下位から底部にかけて残存している小型壺である。3 は台付甗の台部破片である。4 は高坏の脚部であり、透孔 6ヶ所が確認できる。5 は単口縁の鉢であり、底部が欠損している。6 は単孔の甗であり、比較的残存率が高い。7 は岩倉式土器の小破片で、外面に簾状文・波状文が施されている。

本住居跡の時期は、住居跡の形状と出土遺物の特徴から古墳時代前期と考えられる。

2号住居跡 (第 6・10～12 図 図版 1・4・15)

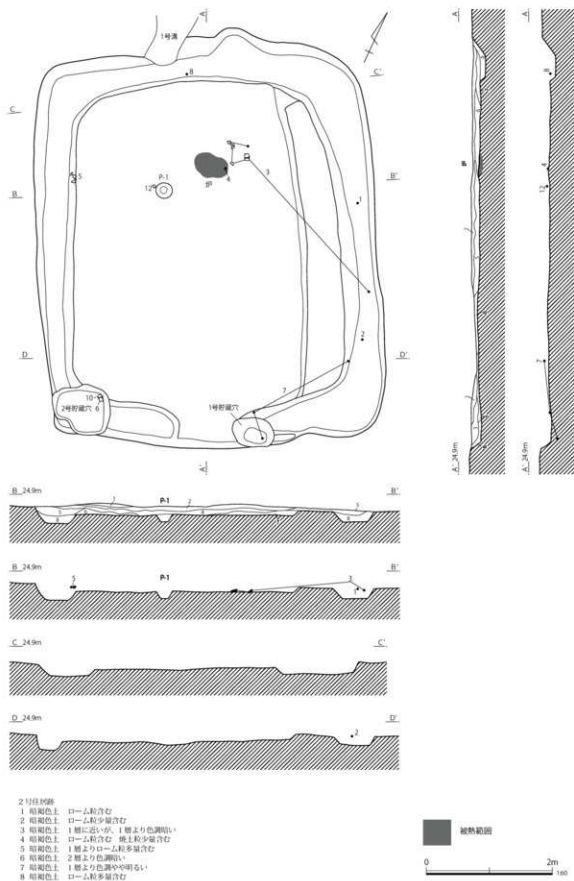
3 区の中央部西に位置する。主軸方向は西壁を基準とすると N-25°W、平面形状は長方形である。検出された規模は長軸 (北一南) 6.67m、短軸 (東一西) 5.36 m を測る。壁は斜めに立ち上がり、最大高は 0.15m を測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、色調及び含有物やしまりの差異で 8 層に分層される。床面はほぼ平坦で、東壁沿い幅 0.50m 程度の範囲が床面から約 0.10m 程度高くなる。壁溝は南壁の中央部以外は、壁際を全周する。壁溝は幅 0.39～0.83m、深さ 0.10～0.13m を測り、断面形状は逆台形状である。掘り方はない。

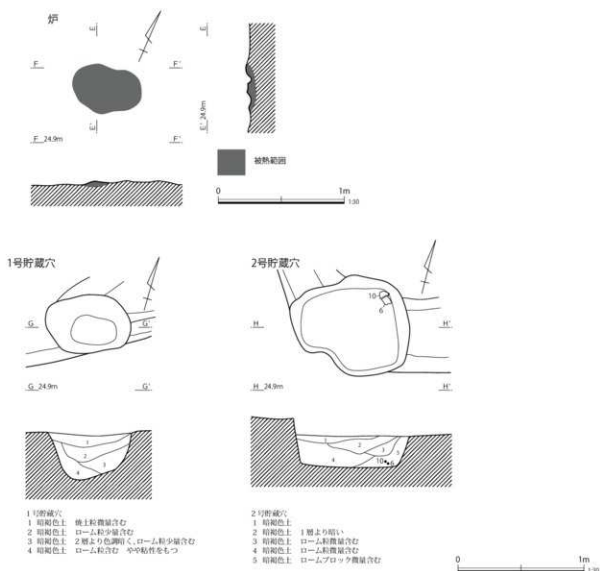
炉は、住居内北寄りの床面で 1 基検出された。長軸 0.53 m、短軸 0.37 m の楕円形の範囲の床面が被熱しており、掘り込みは認められなかった。

柱穴は住居内北寄り、炉から 0.50m 程度南西に 1 基 (P-1) 検出された。平面形状は円形、断面形状は逆台形状であり、検出された規模は径 0.24m、深さ 0.12m を測る。

貯蔵穴は、2 基検出された (1・2 号貯蔵穴)。1 号貯蔵穴は南壁沿いの中央やや東に位置し、平面形状は長方形、断面形状は逆台形状である。規模は長軸 0.68m、短軸 0.47m、深さ 0.36m を測る。覆土からは、土師器台付甗 (第 12 図 7) の体部下端から台部の破片が出土している。2 号貯蔵穴は住居南西隅に位置し、平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形状である。規模は長軸 0.92m、短軸 0.80m、深さ 0.25m を測る。覆土からは、土師器台付甗 (第 12 図 6) の台部と、



第10図 2号住居跡



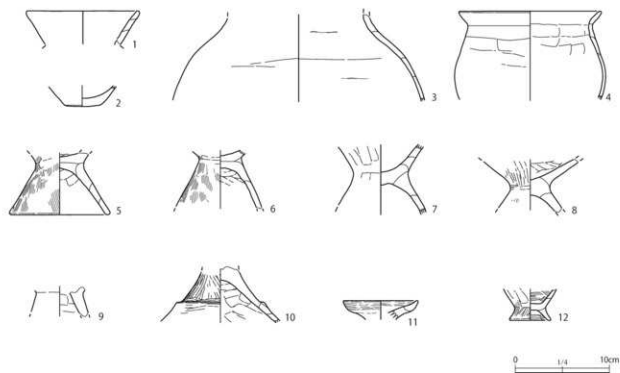
第11図 2号住居跡炉、1・2号貯蔵穴

高環 (第12図10) の脚部が出土している。

遺物は壺3点 (第12図1~3)、甕1点 (第12図4)、台付甕5点 (第12図5~9)、高環1点 (第12図10)、器台1点 (第12図11)、ミニチュア土器1点 (第12図12) を掲載した。9・11は覆土から、12は床面から、3は壁溝覆土と床面から、1・2・5・8は壁溝覆土から、7は1号貯蔵穴と床面から、6・10は2号貯蔵穴から、4は炉からそれぞれ出土した。1は直口壺の口縁部、2は小型から中型の平底の壺の底部、3は大型壺の体部である。何れも器面の大半が摩滅しており、調整が不明瞭である。4は単口縁の甕であり、口縁部から胴部中位の破片である。5~9は

全て台付甕の体部下位から上部であり、外面は刷毛目・撫でが施される。5は台部の端部に折り返しがないことから、単口縁の台付甕と考えられる。10は高環の有段の脚部であり、外面には磨き・撫でが施される。11は小型器台の受部であり、内外面に横方向の磨きか施される。12は台付甕形のミニチュア土器であり、内外面に刷毛目・撫でが施される。

本住居跡の時期は、住居跡の形状と出土遺物の特徴から古墳時代前期と考えられる。



第12図 2号住居跡出土遺物

第4表 2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	土師器 壺	口：(11.7) 高：(3.5)	長・チ	橙色	不良	内外面器面摩滅、調整不明瞭。	口縁部 20%	壁溝 覆土	
2	土師器 壺	高：(2.2) 底：3.8	石・長・凝 ・角・チ	内面：明黄褐色、外面：明黄褐色	良好	内外面に撫で、底部に撫で、器面摩滅、調整不明瞭。	底部 完存	壁溝 覆土	
3	土師器 壺	高：(9.2)	石・長・チ	内面：明赤褐色、外面：明褐色	やや 不良	内外面に撫で、器面摩滅、調整不明瞭。	胴部 破片	床面 壁溝 覆土	
4	土師器 甕	口：(14.9) 高：(9.3)	長・角・チ	内面：赤褐色、外面：明赤褐色	良好	内外面器面摩滅。外面口縁部に横方向の撫で、胴部に縦削り。内面に横方向の撫で、胴部に縦撫で・撫で。	口縁～ 胴部 中位	好	
5	土師器 台付甕	台：(10.3) 高：(6.5)	石・長・片 ・雲・チ	内面：にぶい黄褐色、外面：明黄褐色	良好	外面に刷毛目後ナデ。内面撫で。	台部 20%	壁溝 覆土	
6	土師器 台付甕	高：(6.2)	長・凝・チ	内面：明褐色、外面：橙色	良好	外面に刷毛目。内面撫で。	台部 80%	2号 貯蔵穴	
7	土師器 台付甕	高：(7.5)	石・長・片 ・雲・チ	内面：橙色、外面：明黄褐色	良好	内外面に撫で、器面摩滅、調整不明瞭。	胴部 下位 ～台部	1号 貯蔵穴 床面	
8	土師器 台付甕	高：(5.6)	長・凝・チ	内面：明赤褐色、外面：橙色	良好	内外面器面摩滅。外面に撫で。内面に撫で。	胴部 下位～ 台部 破片	壁溝 覆土	

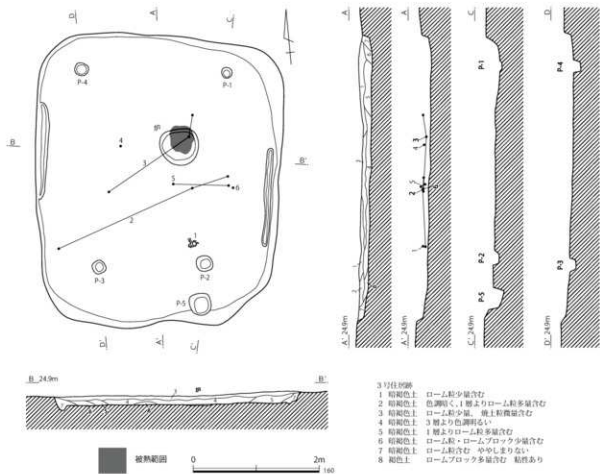
番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
9	土師器 台付甕	高: (3.1)	石・長・輝 ・チ	内面: 橙色、 外面: 明褐色	良好	内外面に撫で、器面摩滅、調整不明瞭。	台部 破片	覆土	
10	土師器 高坏	高: (6.0)	石・長・チ	内面: 灰褐色、 外面: 明 赤褐色	やや 不良	脚部有段。内外面器面摩滅、外面上位 に縦方向、下位に横方向の磨き。内面 撫で。	脚部	2号 貯蔵穴	
11	土師器 器台	口: (7.7) 高: (2.0)	石・長・針 ・チ	橙色	良好	内外面器面摩滅、調整不明瞭。 内外面に横方向の磨き。	受部 30%	覆土	
12	土師器 ミニチュ ア土器	高: (3.3) 台: (4.2)	石・長・チ	明赤褐色	良好	台付甕形。外面に刷毛目後撫で、内面 胴部・台部に刷毛目、底部に撫で。	胴部 下位 ~台部	床面	

3号住居跡 (第6・13~15図 図版1・4・16)

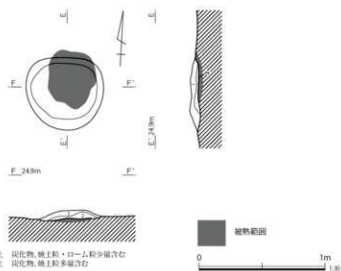
3区の南部に位置する。主軸方向は東壁を基準
とするとN-7°-E、平面形状は長方形である。
検出された規模は長軸(北-南)4.67m、短軸
(東-西)3.91mを測る。壁は斜めに立ち上がり、

最大高は0.18mを測る。

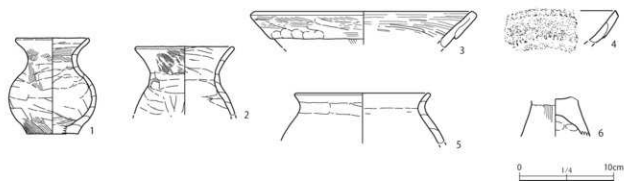
覆土は暗褐色土を主体とし、色調及び含有物や
しまりの差異で8層に分層される。床面はほぼ
平坦であり、東壁と西壁面に沿って壁溝がある。
壁溝は幅0.08~0.20m、深さ0.03~0.07m



第13図 3号住居跡



第14図 3号住居跡炉



第15図 3号住居跡出土遺物

第5表 3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	土師器壺	口:(7.6) 底:(5.4) 高:10.1	石・長・凝・チ	内面:灰黄褐色、外面:にぶい黄褐色	良好	外面口縁部に横方向の撫で、頸部に刷毛目、体部に刷毛目後ナデ。内面口縁部に横方向の撫で、頸部に刷毛目、体部に撫で・指押さえ。	50%	覆土中層	
2	土師器壺	口:(10.1) 高:(7.2)	長・チ	にぶい黄褐色	やや不良	外面に刷毛目後ナデ。内面撫で。	口縁部40%	覆土中層	
3	土師器壺	口:(22.8) 高:(3.8)	石・長・針・チ	内面:明赤褐色、外面:灰黄褐色	良好	複合口縁。外面に刷毛目後横方向の磨き、撫で・指押さえ。内面に横・斜方向の磨き。	口縁部30%	覆土中層	
4	土師器壺	高:(3.4)	石・長・片・雲・チ	橙色	良好	複合口縁。外面口唇部と複合部下端に刷毛状工具による連続剝突。内外面に撫で。	口縁部破片	覆土中層	
5	土師器壺	口:(14.0) 高:(5.3)	石・長・角・チ	内面:明褐色、外面:褐色	やや不良	内外面に撫で、器面摩滅、調整不明瞭。	口縁部25%	覆土中層	
6	土師器台付甕	高:(4.1)	石・長・凝・チ	橙色	良好	内外面器面摩滅、調整不明瞭。外面に刷毛目後撫で。内面に撫で。	台部破片	覆土中層	

を測り、断面形状は逆台形状である。掘り方はない。

炬は、住居内中央や北東寄りの床面で1基検出された。径0.60m程度の円形の範囲が0.03m程度窪んでおり、その底面中央から北側の壁面にかけて長軸0.45m、短軸0.37mの楕円形の範囲が被熱している。

柱穴は5基(P-1～5)検出され、位置関係からP-1～4は主柱穴と考えられる。平面形状はP-1・2・4が円形、P-3が隅丸方形であり、断面形状は全て逆台形状である。検出された規模はP-1が径0.16m、深さ0.04m、P-2が径0.25m、深さ0.09m、P-3が長軸0.20m、短軸0.19m、深さ0.09m、P-4が径0.22m、深さ0.12mを測る。P-5は南壁のやや東寄りに検出され、位置関係から貯蔵穴もしくはは出入口施設に伴う柱穴の可能性が考えられる。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形状であり、検出された規模は0.35m、短軸0.33m、深さ0.16mを測る。

遺物は壺4点(第15図1～4)、甕1点(第15図5)、台付甕1点(第15図6)を掲載した。全て、覆土中層から出土した。1は小型、2は中型の直口壺であり、外面に刷毛目と撫でが施される。3・4は大型の壺の口縁部破片であり、両者

ともに複合口縁をもち、4は口唇部と複合部下端に刷毛状工具によって連続刺突が施される。6は台付甕の台部破片であり、外面に刷毛目の後撫でが施される。

本住居跡の時期は、住居跡の形状と出土遺物の特徴から古墳時代前期と考えられる。

(3) 土坑

1号土坑(第6・16図 図版1・5)

3区の北西部に位置し、南東側に1号住居跡、南側に2号住居跡が隣接する。

平面形状は不定な楕円形、断面形状は階段状である。検出された規模は長軸2.20m、短軸1.15m、深さ0.73mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で5層に分層される。覆土の大部分を占める5層にはロームブロックが含まれており、人為的埋土の可能性が高い。遺物は土師器の壺1点(第16図1)を掲載した。大型の壺の口縁部破片であり、複合口縁をもち口唇部と複合部下端に刷毛状工具によって連続刺突が施される。

遺物は出土しているものの小破片であり混入の可能性が高いことから、本土坑の時期は不明である。



第16図 1号土坑・同出土遺物

第6表 1号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	土師器壺	高:(3.8)	石・長・片・雲・子	内面:にぶい黄褐色、外面:にぶい黄橙色	良好	複合口縁。外面口唇部に刷毛状工具による連続刺突。内外面に撫で。	口縁部破片	覆土	

2号土坑 (第6・17図 図版1・5)

3区の南部中央に位置し、西側に3号住居跡が隣接する。

平面形状は円形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は径1.06m、深さ0.52mを測る。

覆土は5層に分層され、色調は1～3層が暗褐色土、4層が黒褐色土、5層が褐色土である。レンズ状堆積であり、自然堆積と考えられる。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

3号土坑 (第6・17図 図版1・6)

3区の南東部に位置し、西側に1号住居跡が隣接する。

平面形状は楕円形、断面形状は階段状で中央がビット状に窪む。検出された規模は長軸1.80m、短軸0.87m、深さ0.45mを測る。

覆土は6層に分層され、色調は1・2・4層が暗褐色土、3層が黒褐色土、5・6層が黄褐色土である。レンズ状堆積であり、自然堆積と考えられる。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

4号土坑 (第6・17図 図版1)

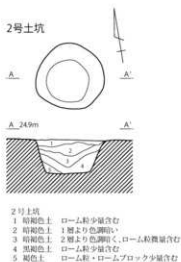
3区の北東部に位置し、西側に1号住居跡が隣接する。

平面形状は楕円形、断面形状は階段状である。検出された規模は長軸1.46m、短軸0.78m、深さ0.53mを測る。

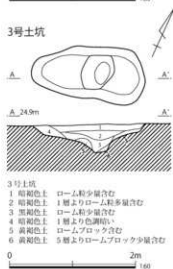
覆土は8層に分層され、色調は1～3・5・6層が暗褐色土、4層が黒褐色土、7・8層が褐色土である。レンズ状堆積であり、自然堆積と考えられる。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

2号土坑



3号土坑



4号土坑



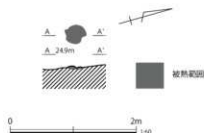
第17図 2～4号土坑

(4) 炉**1号炉跡** (第6・18図 図版1・6)

3区の南東部に位置し、東側に3号土坑が隣接する。

長軸0.34m、短軸0.28mの不定な楕円形の範囲の地山が被熱しており、掘り込みは認められない。

遺物は出土しておらず、本炉跡の時期は不明である。



第18図 1号炉跡

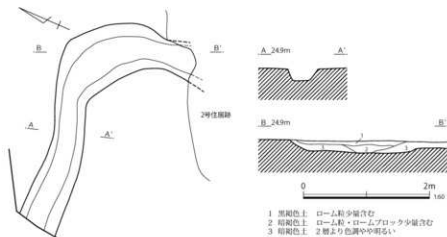
覆土は3層に分層され、色調は1層が黒褐色土、2・3層が暗褐色土である。レンズ状堆積であり、自然堆積と考えられる。

遺物は出土しておらず、本溝の時期は不明である。

(5) 溝**1号溝** (第19図 図版1)

3区の北西部に位置し、調査区西方から東へ進行し、2号住居跡の北部で南方方向へ屈曲するが同住居跡範囲以南では確認できなかった。

検出長4.42m、幅0.50～0.90m、深さ0.20m程度を測り、断面形状は逆台形である。



第19図 1号溝

(6) 遺構外出土遺物 (第20図)

3区の遺構外から出土した遺物として、縄文土器1点(第20図1)、土師器2点(第20図2・3)、須恵器1点(第20図4)を掲載した。

1は縄文土器の小破片であり、地文RL縄文で棒状工具による横位の沈線が施される。

2・3は、古墳時代前期の土師器二重口緑壺の口縁部破片であり、何れも刷毛状工具による連続刺突が施されている。

4は古墳時代後期の須恵器甕の体部小破片であり、櫛歯刺突文が施されている。



第20図 3区遺構外出土遺物

第7表 3区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	縄文土器	高：(4.4)	長・チ	内面：にぶい 橙色、外面： 橙色	良好	地文横位のRL縄文。棒状工具による 横位の沈線。	胴部 破片		
2	土師器 壺	高：(7.4)	石・長・チ	内面：明黄褐色、外面：明 黄褐色	やや 不良	二重口縁。口唇部直下と複合部下端に 刷毛状工具による連続刺突。内外面に 撫で、器面摩滅、調整不明瞭。	口縁部 破片		
3	土師器 壺	高：(4.0)	石・長・チ	内面：にぶい 黄褐色、外面： 明黄褐色	やや 不良	二重口縁。口唇部直下に刷毛状工具 による連続刺突。内外面に撫で、器面摩 滅、調整不明瞭。	口縁部 破片		
4	須恵器 壺	高：(2.3)	長・チ	内面：褐灰 色、外面：に ぶい黄褐色	半還元	体部中に御南刺突文。	体部 破片		

3 新町遺跡4区

(1) 新町遺跡4区の概要

新町遺跡4区は遺跡範囲の中央やや北西に位置し、胴山古墳(新町1号墳)が南東に隣接する(第3・4図)。調査は個人住宅建設に伴い、平成9年5月7日から同年6月17日まで実施された。調査面積は約306㎡、標高は現況の地表面で24m前後を測り、確認面はローム上面である。

調査の結果、古墳の周溝の一部が2条検出された。調査区南東部に検出された周溝は2号墳の北西縁辺部、調査区北西部に検出された周溝は8号墳の南東縁辺部である。周溝の覆土からは、何れも円筒埴輪が出土しており、2号墳からは形象埴輪の破片も出土している。

(2) 古墳

2号墳(第21～25図 図版7～9・16)

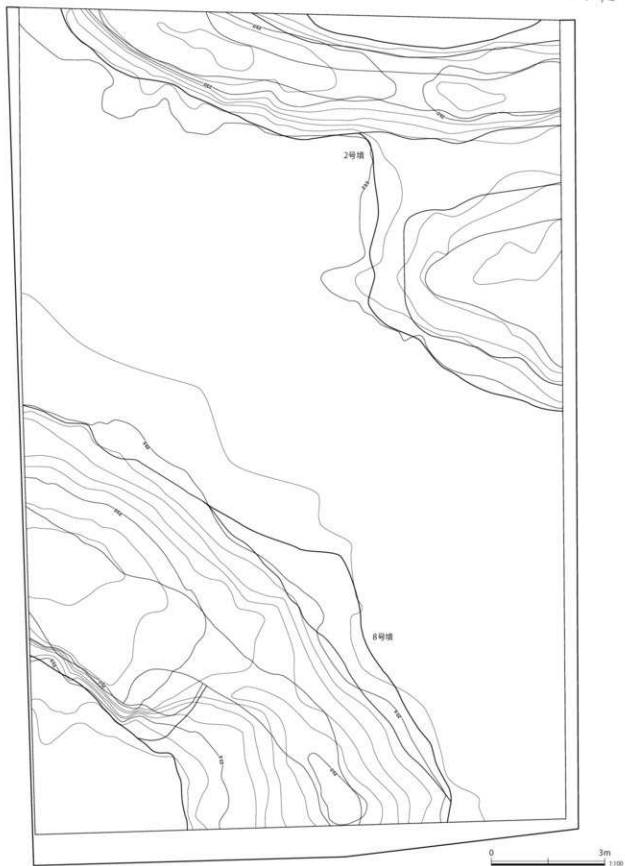
調査区東部に検出された周溝は、新町古墳群2号墳の周溝に該当する。2号墳の南東側に隣接す

る胴山古墳の陪塚と考えられる円墳である。規模は直径約16m、墳丘高1.3mであったが、墳丘は宅地となり既に消滅している。

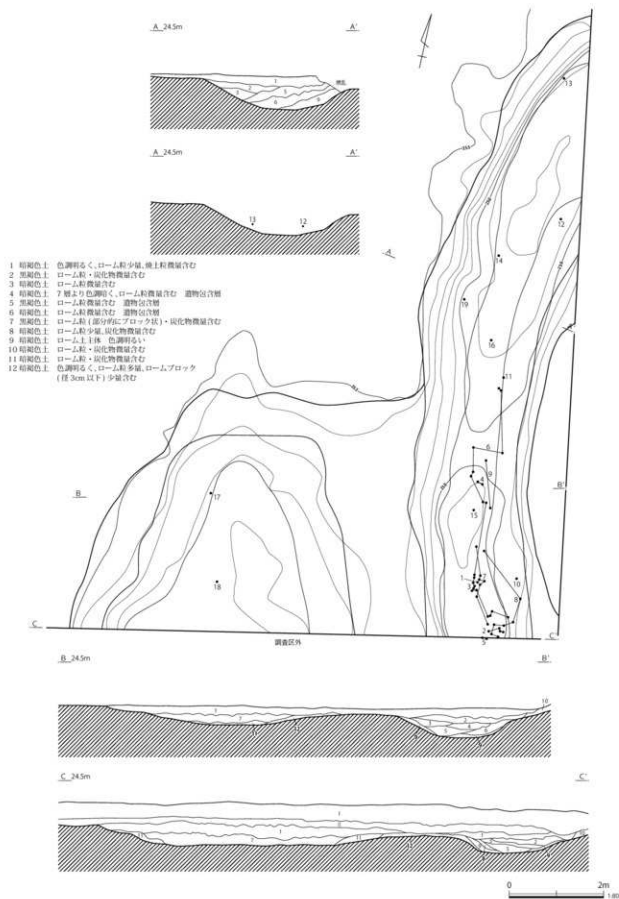
今回の調査で検出された周溝は、2号墳周溝の西から北西部にあたる。検出された周溝は調査区南部にて西側に張り出しており、2号墳の周溝が西端部で凸字状に張り出していたか、もしくは胴山古墳の前方部側の周溝の一部が検出された可能性がある。検出された周溝の規模は幅2.50～3.20m、最深部での深さ約0.64m、張り出し部分は7.76m、周溝を含めると幅10.34m、最深部での深さ約0.54mを測る。

覆土は12層に分層された。暗褐色土を主体とし、2・5・7層は黒褐色土であり、レンズ状堆積であることから全て自然堆積と考えられる。特に4～6層からは埴輪を主体とする遺物が多く出土しており、墳丘が崩落したものと考えられる。

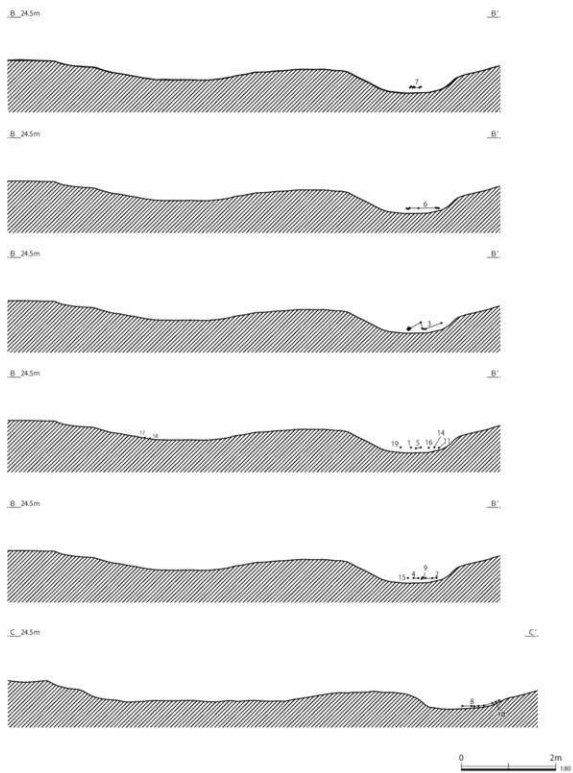
遺物は周溝の覆土から出土しており、このうち、円筒埴輪9点(第24図1～9)、形象埴輪4点



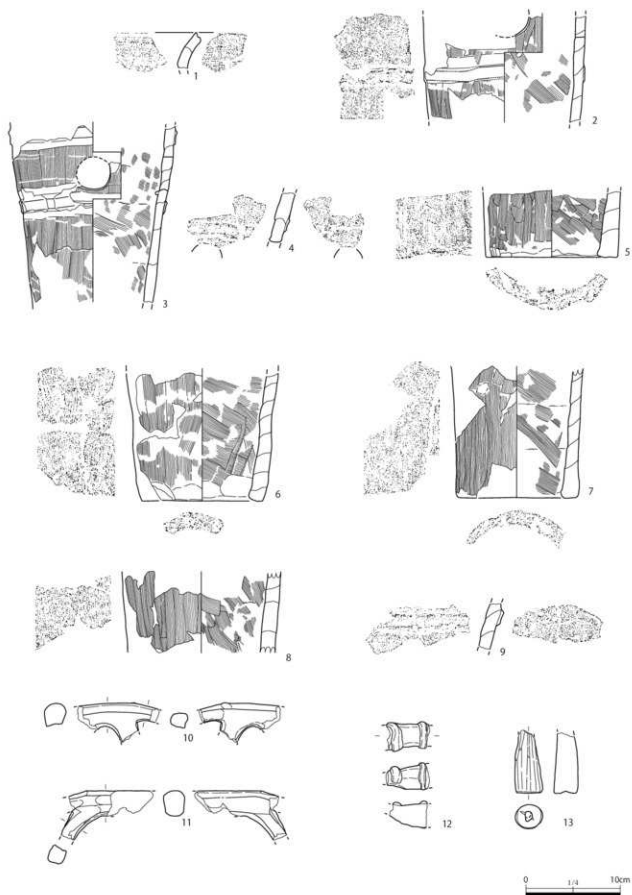
第 21 図 新町遺跡 4 区全体図



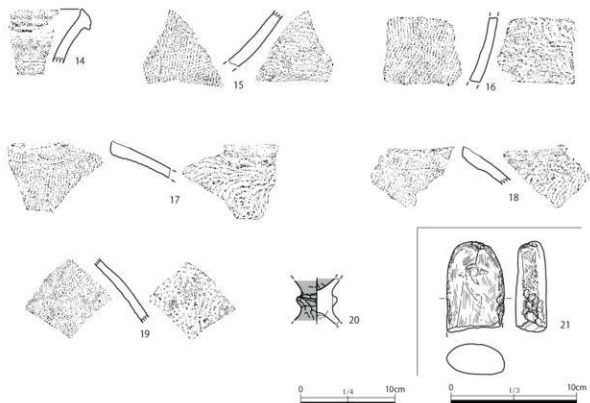
第22図 2号墳(1)



第23図 2号墳(2)



第 24 図 2 号墳出土遺物 (1)



第25図 2号墳出土遺物(2)

第8表 2号墳出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	円筒埴輪	高:(3.8)	石・長・角 ・チ・赤	橙色	良好	内外面刷毛目後、口縁部に横方向の撫で。	口縁部破片	周溝覆土	
2	円筒埴輪	高:(11.2)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目、内面に斜方向の刷毛目。	体部破片	周溝覆土	
3	円筒埴輪	高:(18.6)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔2ヶ所残存、推定円孔。突帯2条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目、内面に斜方向の刷毛目。	体部破片	周溝覆土	
4	円筒埴輪	高:(5.2)	石・長・輝 ・チ・赤	黄褐色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。内外面刷毛目・指押さえ。	体部破片	周溝覆土	
5	円筒埴輪	高:(6.9) 底:(12.8)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目、内面に斜方向の刷毛目・撫で、体部下端～基部に撫で。	体～基部	周溝覆土	
6	円筒埴輪	高:(13.5) 底:(12.8)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目、内面に斜方向の刷毛目・撫で。内外面体部下端～基部に撫で。	体～基部	周溝覆土	
7	円筒埴輪	高:(13.7) 底:(12.6)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目、内面に斜方向の刷毛目・撫で、基部に撫で。	体～基部	周溝覆土	
8	円筒埴輪	高:(8.7)	石・長・角 ・輝・チ・赤	黄褐色	良好	外面に縦方向の刷毛目、内面に斜方向の刷毛目。	体部	周溝覆土	

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
9	円筒埴輪	高:(4.8)	石・長・柳・チ・赤	黄褐色	良好	突帯1条貼り付け。内外面刷毛目・指押さえ。	体部破片	周溝覆土	
10	形象埴輪	長:(4.2) 幅:(8.7) 厚:2.2	長・角・チ	内面:にぶい黄褐色、外面:にぶい黄褐色	良好	内外面撫で。	破片	周溝覆土	
11	形象埴輪	長:(5.2) 幅:(9.7) 厚:2.7	石・長・角・チ	内面:にぶい黄褐色、外面:にぶい褐色	良好	内外面撫で。	破片	周溝覆土	
12	形象埴輪	長:(4.6) 幅:2.8 厚:2.5	石・長・柳・角・チ・赤	褐色	良好	人物埴輪の腕部か。	破片	周溝覆土	
13	形象埴輪	長:(6.7) 幅:2.9 厚:2.6	石・長・柳・角・チ・赤	褐色	良好	人物埴輪の美豆良部か。	破片	周溝覆土	
14	須恵器 甕	高:(5.8)	片・チ	黄灰色	還元	内外面横方向の撫で。口縁部の文様は、斜線文を羽状に配置する。	口縁部破片	周溝覆土	
15	須恵器 甕	高:(6.0)	石・長・チ	内面:黒色、外面:灰オリーブ色	還元	外面に平行タタキ。内面に同心円文当て具。	胴部破片	周溝覆土	
16	須恵器 甕	高:(6.8)	石・長・片・チ	内面:にぶい黄色、外面:灰黄色	半還元	外面に平行タタキ。内面に同心円文当て具。	胴部破片	周溝覆土	
17	須恵器 甕	高:(3.8)	長・片・チ・白	内面:にぶい赤褐色、外面:灰黄褐色	半還元	外面に平行タタキ。内面に同心円文当て具。	胴部上端破片	周溝覆土	
18	須恵器 甕	高:(4.0)	長・片・チ・白・黒	内面:褐色、外面:灰黄褐色	半還元	外面に平行タタキ。内面に同心円文当て具。	胴部上端破片	周溝覆土	
19	須恵器 甕	高:(6.8)	石・長・チ・白	内面:黒色、外面:明黄褐色	還元	外面に平行タタキ。内面に同心円文当て具。	胴部破片	周溝覆土	
20	土師器 高坏	高:(4.9)	石・長・柳・角・チ	褐色	良好	脚部に突帯。内外面に撫で。外面と坏部内面に赤彩。	脚部破片	周溝覆土	
21	石器 蔵石 砥石	長:7.2+ 幅:4.6 厚:2.5 重:119.6+	—	—	—	石材:砂岩 棒状に近い礫を素材とする。上下両端及び側面を蔵石として使用し、破損後に器面全体を砥石に用いる。	下半欠損	周溝覆土	

(第24図10～13)、須恵器6点(第25図14～19)、土師器1点(第25図20)、石器1点(第25図21)を掲載した。

円筒埴輪は全て内外面に刷毛目調整が施されている。1は口縁部の小破片である。2～4は透孔と突帯が残存し、3のみ遺存状態から3段2条以上であり、透孔が同段に2方に確認できる。

5～7は、基部が残存しており、何れも基部径12.6～12.8cmであることが確認できる。9は突帯をもつ体部小破片である。形象埴輪は何れも小破片であり、10・11は部位不明、12は人物埴輪の腕部、13は人物埴輪の美豆良部と考えられる。須恵器は全て甕の小破片で、14・15・19は還元、16～18は半還元である。14は口縁部

破片で、斜線文を羽状に配置した文様が施されている。その他は胴部破片で、外面に平行タタキ、内面に同心円文当て具が施されている。20は土師器高坏脚部の破片で、脚部に突帯が巡り、外面全体と坏部内面が赤彩される。21は砂岩の敲石であり、破損後砥石として転用されている。

本古墳の時期は、周溝内から出土した遺物の特徴から古墳時代後期と考えられる。

8号墳 (第21・26～33図 図版7・10・11・17～19)

調査区西部に検出された周溝は、新町古墳群の8号墳の周溝に該当する。8号墳はかつて墳頂のほぼ中央に愛宕社が奉祀されており、愛宕塚古墳とも呼ばれていた。規模は直径約17m、墳丘高3.4mであったが、墳丘は削平され平坦になっている。

今回の調査区西部から検出された周溝は、8号墳周溝の南東部にあたる。検出された周溝の規模は幅5.84～7.20m、最深部での深さ約0.82mを測る。

覆土は17層に分層された。暗褐色土・暗茶褐色土・黒褐色土であり、レンズ状堆積であることから全て自然堆積と考えられる。特に4・6・8・9・11・13・14・16層から埴輪を主体とする遺物が多く出土しており、墳丘の盛土が崩落したものと考えられる。

遺物は周溝の覆土から出土しており、このうち、円筒埴輪59点(第28～33図1～59)、須恵器2点(第33図60・61)、弥生土器3点(第33図62～64)、土師器2点(第33図65・66)、陶器1点(第33図67)、石器2点(第33図68・69)を掲載した。弥生土器、土師器、陶器は全て混入であり、石器もその可能性が高い。

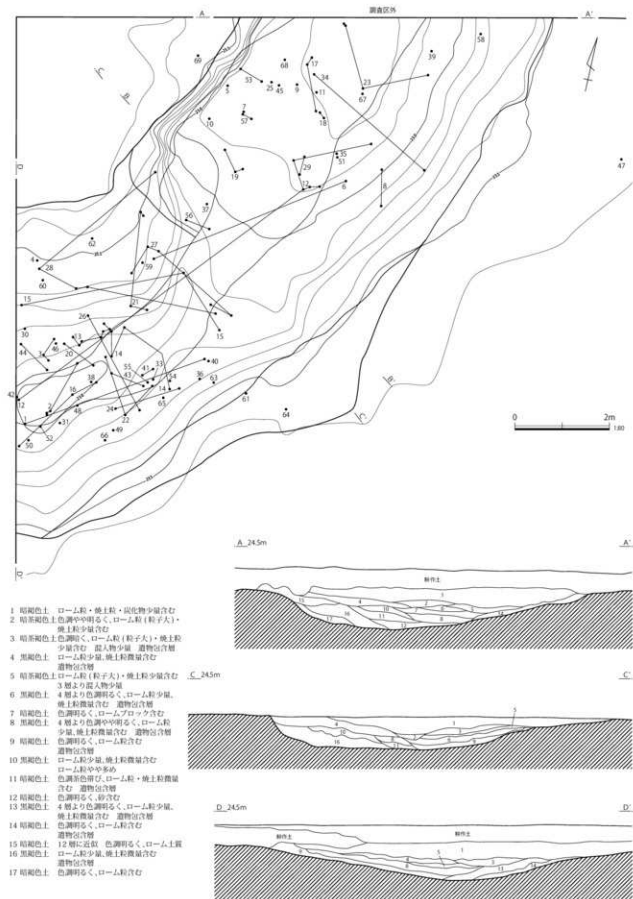
円筒埴輪のなかで、口縁部から基部まで全体が残存している個体はない。口縁部が残存しているのは1～11であり、1は突帯と透孔が残存し、1～3は口径28.9～38.7cmと推定されている。1～4・6～8・10・11は内面口縁部から体部上端に刷毛目調整が施されていることが認められる。内面刷毛目調整が確認できないのは5・9であり、9は内面は撫で調整が施され、5は器面が

摩滅しており調整は不明瞭である。1・12～15・17～22・29～40は透孔と突帯が残存し、全て円孔が推定される。基部から体部が残存し透孔が確認できるものは12～15・21・22であり、何れも透孔は2段目に設けられている。12は2条3段以上、14は3条4段である。12～15・21～27・57～59は基部が残存しており、そのうち12は基部が完存し基部径13.3cmであることが確認できる。推定復元できるものは径11.8～15.9cmの範囲内で取まっている。出土した埴輪を概観すると、8号墳の円筒埴輪は4条3段ないし2条3段で、外面全体に縦方向の刷毛目、内面は縦方向の撫でを基本とし口縁部から体部上端のみ横から斜方向の刷毛目が施されていたものと考えられる。

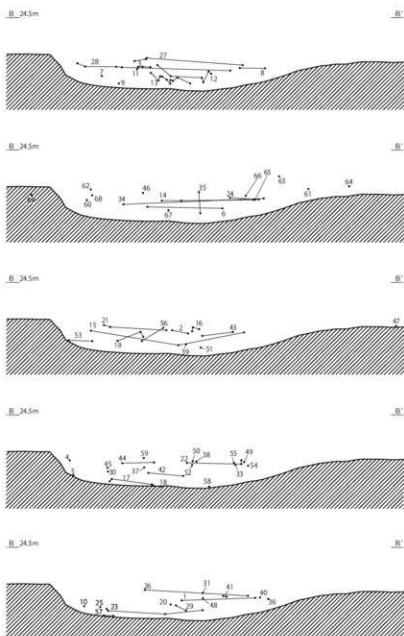
須恵器は60・61はともに還元した甕の小破片で、60は外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円文当て具が、61は外面に平行タタキ後撫で、内面に無文の当て具と撫でが確認できる。

弥生土器は何れも小破片である。62は壺であり、棒状工具による山形の沈線と円形刺突が施されている。63・64は岩島式土器の甕であり、63は簾状文と櫛波状文、64は櫛波状文が確認できる。土師器の65は単孔の甕の底部、66は大型の壺の底部破片で、外面に刷毛目が施されていることから古墳時代前期のものと考えられる。67は常滑産陶器の甕の破片で、中世のものである。石器は、全て敲石である。68は砂岩で完存しており、69は緑色片岩で上部が欠損している。

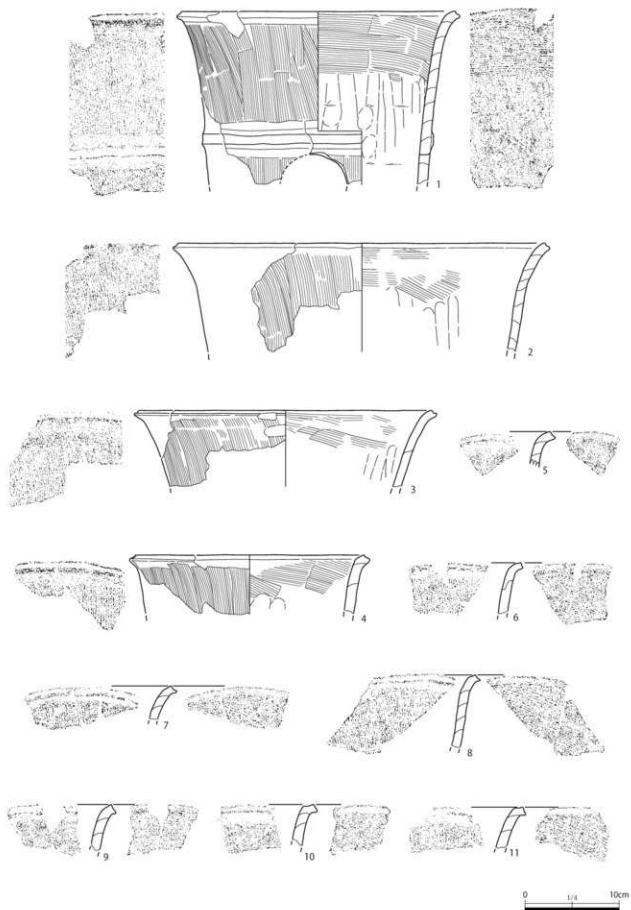
本古墳の時期は、周溝内から出土した遺物の特徴から古墳時代後期と考えられる。



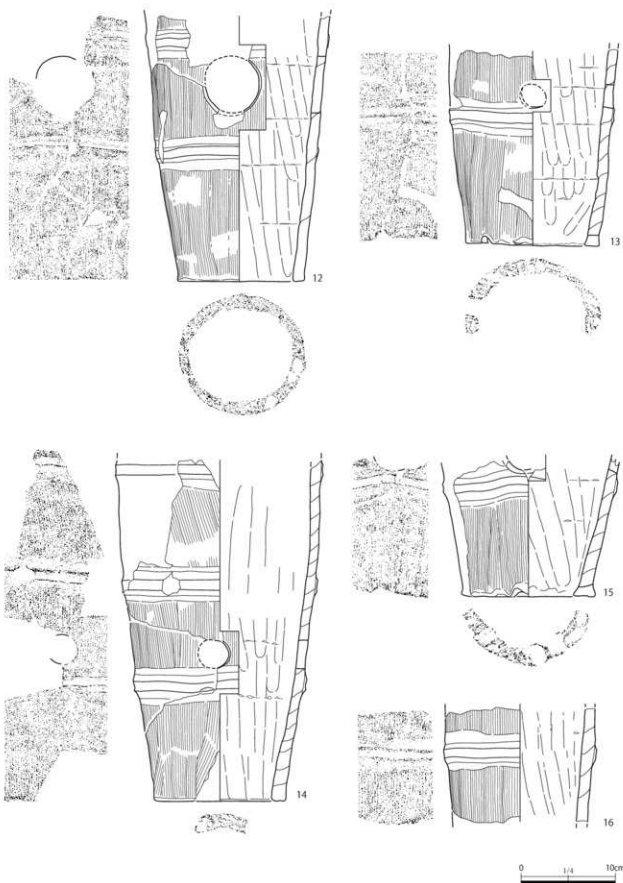
第26図 8号墳(1)



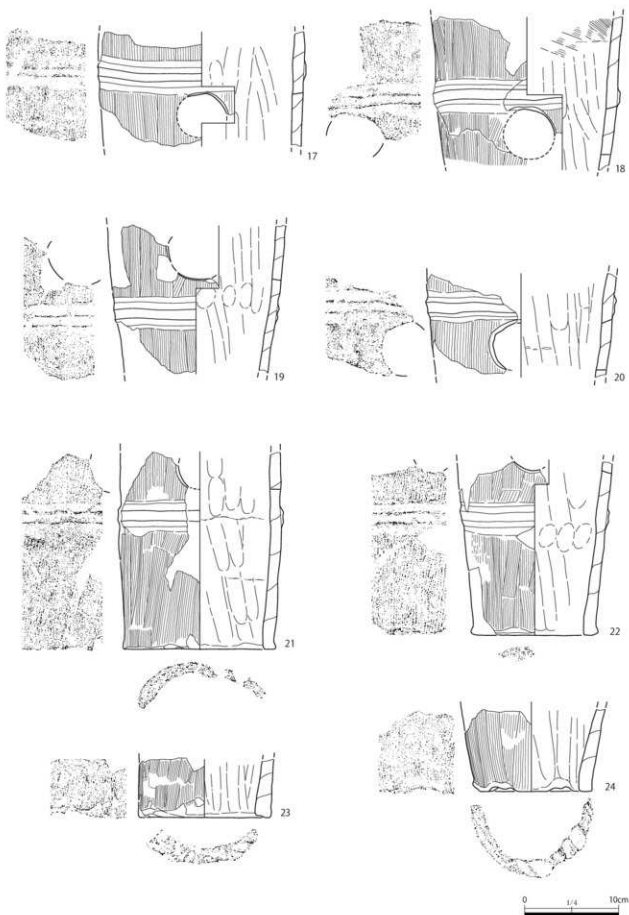
第 27 图 8 号墳 (2)



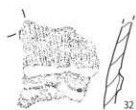
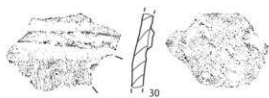
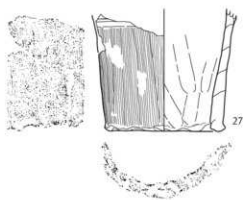
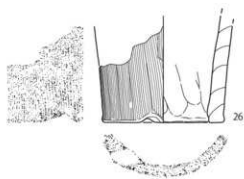
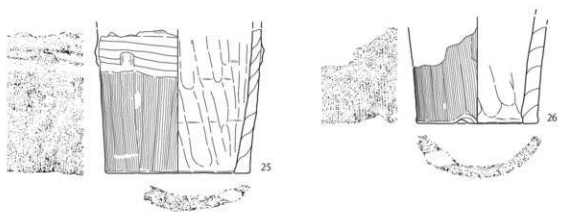
第 28 図 8 号墳出土遺物 (1)



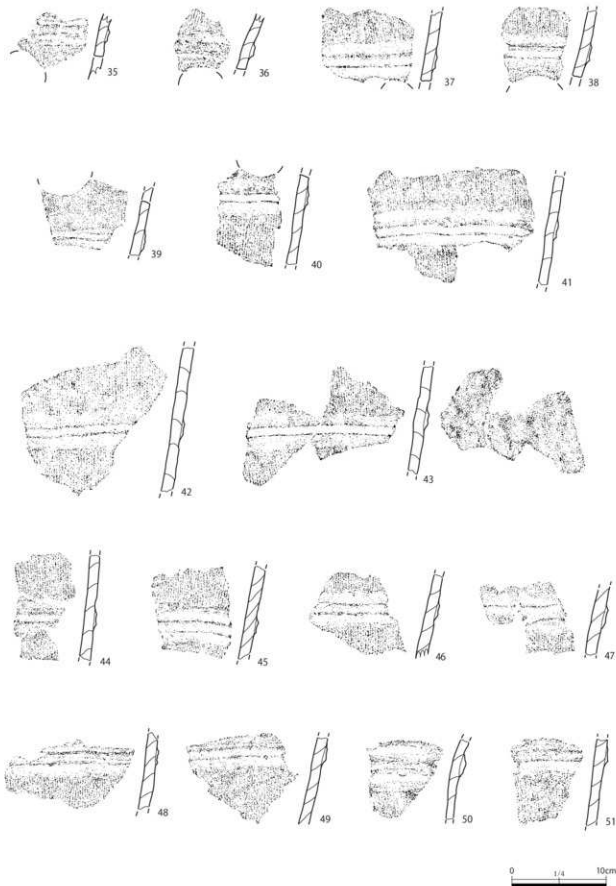
第 29 図 8号墳出土遺物 (2)



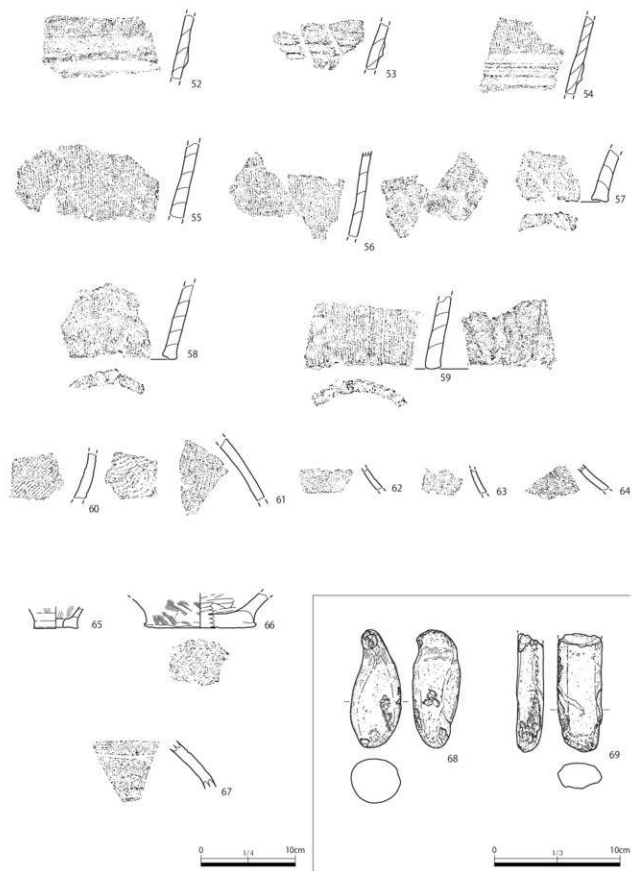
第30図 8号墳出土遺物(3)



第31图 8号墳出土遺物(4)



第 32 図 8 号墳出土遺物 (5)



第 33 图 8号墳出土遺物 (6)

第9表 8号墳出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	円筒埴輪	口：(28.9) 高：(18.2)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面口縁部に撫で、体部に縦方向の刷毛目。内面口縁部に撫で、体部上位に横方向の刷毛目、体部中位に縦方向の指撫で・指押さえ。	口縁～ 体部	周溝 覆土	
2	円筒埴輪	口：(38.7) 高：(11.4)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面口唇部に撫で、体部に縦方向の刷毛目。内面口唇部に撫で、口縁～体部上位に刷毛目、体部中位に縦方向の撫で。	口縁～ 体部	周溝 覆土	
3	円筒埴輪	口：(31.0) 高：(8.1)	石・長・片 輝・チ・ 赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面口縁部に横方向の撫で、体部上端に斜方向の刷毛目、中位に撫で。	口縁～ 体部	周溝 覆土	
4	円筒埴輪	口：(24.2) 高：(6.2)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面口縁部に横方向の撫で、体部上端に斜方向の刷毛目、中位に撫で。	口縁～ 体部	周溝 覆土	
5	円筒埴輪	高：(3.8)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面器面摩滅、調整不明瞭。	口縁～ 体部 破片	周溝 覆土	
6	円筒埴輪	高：(5.4)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	やや 良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面口縁部に横方向の撫で、体部に斜方向の刷毛目。	口縁～ 体部 破片	周溝 覆土	
7	円筒埴輪	高：(3.5)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面口縁部に横方向の撫で、体部に斜方向の刷毛目。	口縁～ 体部 破片	周溝 覆土	
8	円筒埴輪	高：(7.7)	石・長・輝 ・角・チ・ 赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面口縁部に横方向の撫で、体部に斜方向の刷毛目。	口縁～ 体部 破片	周溝 覆土	
9	円筒埴輪	高：(4.9)	石・長・輝 ・角・チ・ 赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面に撫で。	口縁～ 体部 破片	周溝 覆土	
10	円筒埴輪	高：(4.4)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面に斜め方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で。	口縁～ 体部 破片	周溝 覆土	
11	円筒埴輪	高：(4.4)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目後、口縁部に横方向の撫で、内面口縁部に横方向の撫で、体部に斜方向の刷毛目。	口縁～ 体部 破片	周溝 覆土	
12	円筒埴輪	高：(28.0) 底：13.3	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔2方、2ヶ所残存、推定円孔。突帯2条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
13	円筒埴輪	高：(20.8) 底：(13.9)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔2方、1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
14	円筒埴輪	高：(36.0) 底：(13.8)	石・長・輝 ・チ・赤	内面：浅黄橙 色、外面：橙 色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯3条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
15	円筒埴輪	高：(15.0) 底：(13.8)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
16	円筒埴輪	高：(12.0)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で。	体部	周溝 覆土	
17	円筒埴輪	高：(12.1)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で。	体部	周溝 覆土	
18	円筒埴輪	高：(16.2)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面上位に刷毛目、中～下位に縦方向の指撫で。	体部	周溝 覆土	
19	円筒埴輪	高：(15.6)	石・長・角 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部	周溝 覆土	
20	円筒埴輪	高：(11.0)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	透孔2ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で。	体部	周溝 覆土	
21	円筒埴輪	高：(20.8) 底：(15.9)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
22	円筒埴輪	高：(18.3) 底：(13.4)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
23	円筒埴輪	高：(6.2) 底：(13.8)	石・長・輝 ・角・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
24	円筒埴輪	高：(8.7) 底：(12.0)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
25	円筒埴輪	高：(15.2) 底：(15.0)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
26	円筒埴輪	高：(11.3) 底：(12.4)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
27	円筒埴輪	高：(13.0) 底：(11.8)	石・長・輝 ・チ・赤	浅黄褐色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部	周溝 覆土	
28	円筒埴輪	高：(7.0)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目。内面に斜方向の刷毛目、撫で。	口縁～ 体部 破片	周溝 覆土	
29	円筒埴輪	高：(11.4)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
30	円筒埴輪	高：(7.8)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に斜方向の刷毛目・指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
31	円筒埴輪	高：(7.8)	石・長・輝 ・チ・赤	明黄褐色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に斜方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	

III 発見された遺構と遺物

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
32	円筒埴輪	高：(9.1)	石・長・輝 ・チ・赤	明褐色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
33	円筒埴輪	高：(10.7)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
34	円筒埴輪	高：(10.0)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
35	円筒埴輪	高：(6.9)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
36	円筒埴輪	高：(5.8)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面上位に横方向の刷毛目、下位に指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
37	円筒埴輪	高：(7.2)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
38	円筒埴輪	高：(7.0)	石・長・輝 ・チ・赤	明黄褐色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
39	円筒埴輪	高：(7.1)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
40	円筒埴輪	高：(9.5)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	透孔1ヶ所残存、推定円孔。突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
41	円筒埴輪	高：(11.5)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
42	円筒埴輪	高：(15.2)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
43	円筒埴輪	高：(11.4)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
44	円筒埴輪	高：(11.1)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
45	円筒埴輪	高：(9.8)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
46	円筒埴輪	高：(8.9)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
47	円筒埴輪	高：(7.2)	石・長・輝 ・チ・赤	浅黄褐色	やや 良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
48	円筒埴輪	高:(8.1)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
49	円筒埴輪	高:(9.1)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
50	円筒埴輪	高:(8.4)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦・斜方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
51	円筒埴輪	高:(9.1)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
52	円筒埴輪	高:(6.7)	石・長・輝 ・チ・赤	明赤褐色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦・斜方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
53	円筒埴輪	高:(4.8)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
54	円筒埴輪	高:(8.2)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	突帯1条貼り付け。外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
55	円筒埴輪	高:(7.9)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で・指押さえ。	体部 破片	周溝 覆土	
56	円筒埴輪	高:(9.1)	石・長・輝 ・チ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目。内面上位に横・斜方向の刷毛目、下位に撫で。	体部 破片	周溝 覆土	
57	円筒埴輪	高:(5.5)	石・長・輝 ・チ・赤	浅黄橙色	やや 良好	外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部 破片	周溝 覆土	
58	円筒埴輪	高:(7.9)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部 破片	周溝 覆土	
59	円筒埴輪	高:(7.7)	石・長・チ ・赤	橙色	良好	外面に縦方向の刷毛目。内面に縦方向の指撫で、基部に撫で。	体～ 基部 破片	周溝 覆土	
60	須恵器 甕	高:(4.8)	石・長・チ	内面:灰褐色 色、外面:黒 褐色	還元	外面に平行タタキ後カキ目。内面に同心門文当て具。	胴部 破片	周溝 覆土	
61	須恵器 甕	高:(6.6)	石・長・チ	内面:暗赤褐 色、外面:黄 灰色	還元	外面に平行タタキ後撫で。内面に無文の当て具、撫で。	胴部 破片	周溝 覆土	
62	弥生土器 甕	高:(2.2)	石・長・輝 ・チ	灰褐色	良好	棒状工具による山形の沈線と凹形刺突。	胴部 破片	周溝 覆土	
63	岩鼻式 土器 甕	高:(2.5)	石・長・輝 ・チ	明赤褐色	良好	外面に崖状文、柳描波状文。内面に撫で。	体部 破片	周溝 覆土	

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
64	岩鼻式土器壺	高:(2.7)	石・長・赤	橙色	良好	外面に磨挫波状文、刷毛目後撫で。内面に刷毛目後撫で。	体部破片	周溝覆土	
65	土師器飯か	高:(2.1) 底:4.6	石・長・柳・チ	橙色	良好	外面体部に刷毛目後撫で、底部に撫で、内面に刷毛目。底部穿孔、焼成前に穿孔。	底部完存	周溝覆土	
66	土師器壺	高:(3.6) 底:(11.8)	石・長・角・チ	内面:黒色、 外面:橙色	良好	外面体部に刷毛目、底部に荒削り。内面に撫で。	底部15%	周溝覆土	
67	陶器壺	高:(5.1)	石・長・チ	内面:ぶい 赤褐色、外面: 暗赤褐色	還元	外面に撫で、沈線。内面に撫で。	胴部破片	周溝覆土	常磐産 中世
68	石器 礫石	長:9.4 幅:4.0 厚:3.8 重:16.6	—	—	—	石材:砂岩 上下両端及び側面の一部に礫石としての痕跡が残る。また、上方の括れ部に、1.5cmの幅で研磨痕がめぐる。	完存	周溝覆土	
69	石器 礫石	長:9.4+ 幅:3.6 厚:2.2 重:122.6+	—	—	—	石材:緑色片岩 棒状の礫を素材とし、器体上半を欠損する。先端及び下方の脚縁を中心に敲打痕が明瞭に残る。	上半部欠損	周溝覆土	

4 新町遺跡5区

(1) 新町遺跡5区の概要

新町遺跡5区は遺跡範囲の南東部、胴山古墳(新町1号墳)から約70m程度南東に位置する(第3図)。調査は個人住宅建設に伴い、平成16年9月13日から同年10月29日まで実施された。調査面積は約454㎡、標高は現況の地表面で24.5m前後を測り、確認面はローム上面である。

調査の結果、井戸2基(1・2号井戸)、土坑11基(1～11号土坑)、ピット20基(1～20号ピット)、溝1条(1号溝)が検出された。1号溝は調査区西壁以外の周囲を「コ」の字状に走り北西隅で南へ屈曲しており、その区画内に井戸・土坑・ピットが確認された。北東部には1号井戸、北西部には2号井戸とその周辺のピット群、南西部には方形基調の土坑群がそれぞれ偏在して分布する。遺物の出土は少なく、11号土坑と1号溝から須恵器と中世初頭・近世の遺物が出土している。検出された遺構の詳細な時期は不明であるが、おそらく中世初頭のものが主体であると推察される。

(2) 井戸

1号井戸(第34・35図 図版12)

5区1号溝の区画内、北東部に位置する。安全上の理由から、底面まで掘削できなかった。

構造は素掘り、平面形状は円形、断面形状は漏斗状である。検出された規模は長軸3.20m、短軸3.08m、深さ2.40m以上を測り、底面標高は21.35m以下となる。

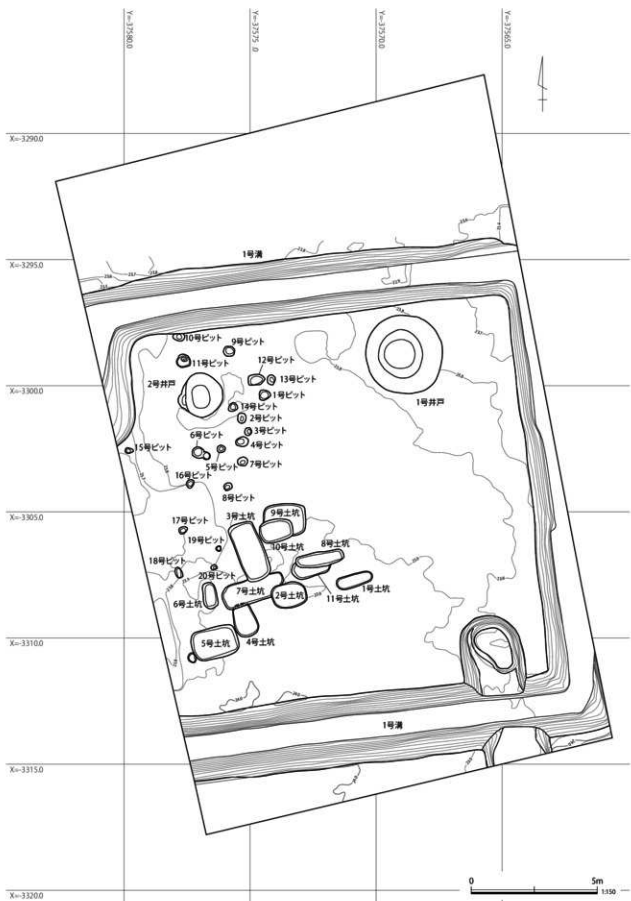
覆土は16層に分層され、色調は1～15層が暗褐色土、16層が褐色土である。断面観察ができた上層はレンズ状堆積であり、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していないが、位置関係からは構築時既に1号溝が存在していたと示唆され、1号溝と同時期の可能性が考えられる。

2号井戸(第34・35図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に位置する。安全上の理由から、底面まで掘削できなかった。

構造は素掘り、平面形状は円形、断面形状は漏



第34図 新町遺跡5区全体図

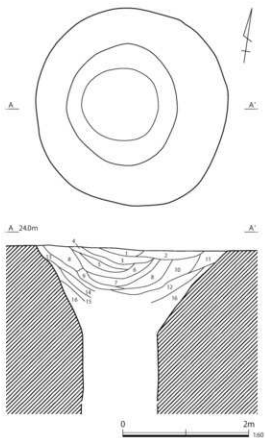
斗状である。検出された規模は長軸 1.80 m、短軸 1.74 m、深さ 2.55m 以上を測り、底面標高は 21.33m 以下となる。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で 7 層に分層される。断面観察ができた上層

はレンズ状堆積であり、自然堆積と考えられる。

遺物は出土していないが、位置関係からは構築時既に 1 号溝が存在していたと示唆され、1 号溝と同時期の可能性が考えられる。

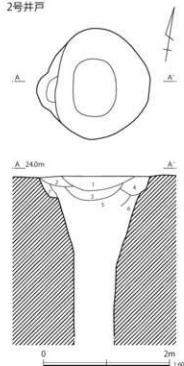
1号井戸



1号井戸

- 1 暗褐色土 郭壁上・焼土粒・炭化物・ローム粒・小礫含む
- 2 暗褐色土 1層と同質 黒色土少量含む
- 3 暗褐色土 2層と同質 穴れ込みの溝
- 4 暗褐色土 1層と同質
- 5 暗褐色土 2層と同質
- 6 暗褐色土 1層と同質
- 7 暗褐色土 2層と同質
- 8 暗褐色土 1層と同質 色調やや暗くしまる
- 9 暗褐色土 8層と同質 しまりに欠ける
- 10 暗褐色土 色調明るく、2層と同質 中やしまる
- 11 暗褐色土 1層と同質 黒色土多く含む
- 12 暗褐色土 1層と同質 色調ローム強め
- 13 暗褐色土 1層と同質 炭化物多く含む
- 14 暗褐色土 ローム粒多量・炭化物・黒色土・焼土粒微量含む 砂質土
- 15 暗褐色土 14層と同質 色調褐色強め
- 16 暗褐色土 ローム土・黒色土含む

2号井戸



2号井戸

- 1 暗褐色土 ローム粒・砂質土層・黒色土粒含む
- 2 暗褐色土 ローム粒多量・砂質土粒・黒色土粒含む
- 3 暗褐色土 1層より色調暗くややしまる ローム粒(一部ブロック状)・砂質土粒・黒色土粒含む
- 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(径 1cm以下)・黒色土粒・炭化物含む
- 5 暗褐色土 ローム粒(種子入)・炭化物・黒色土ブロック含む 砂質土
- 6 暗褐色土 色調褐色強め、ローム粒(種子入)多量、黒色土含む
- 7 暗褐色土 ローム粒多量(ブロック状)・砂質土・黒色土含む しまる

第 35 図 1・2号井戸

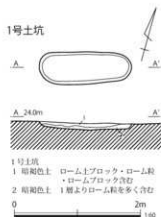
(3) 土坑**1号土坑** (第34・36図 図版12)

5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで東端に位置する。

平面形状は楕円形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸1.45m、短軸0.51m、深さ0.10mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で2層に分層される。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

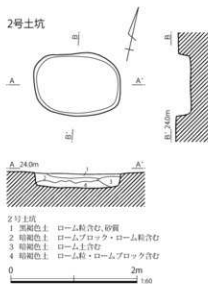
**2号土坑** (第34・36図 図版12)

5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで中央南に位置する。

平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸1.36m、短軸1.00m、深さ0.22mを測る。

覆土は4層に分層され、1層が黒褐色土、2～4層が暗褐色土である。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

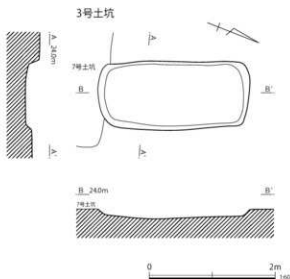
**3号土坑** (第34・36図 図版12)

5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで中央に位置する。

平面形状は長方形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸2.40m、短軸1.09m、深さ0.17mを測る。

覆土は記録されておらず、不明である。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。



第36図 1～3号土坑

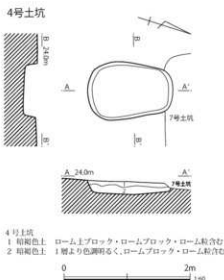
4号土坑 (第34・37図 図版12)

5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで南西に位置する。

平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸1.35m、短軸0.92m、深さ0.20mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で2層に分層される。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。



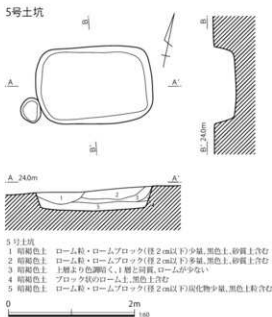
5号土坑 (第34・37図 図版12)

5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで南西端に位置する。

平面形状は長方形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸1.85m、短軸1.23m、深さ0.35mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で5層に分層される。ロームブロックの混入が目立ち、人為的埋土の可能性もある。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。



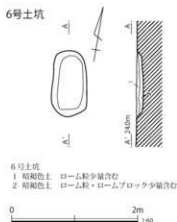
6号土坑 (第34・37図 図版12)

5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで南西に位置する。

平面形状は楕円形、断面形状は孤状である。検出された規模は長軸1.03m、短軸0.55m、深さ0.11mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で2層に分層される。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。



第37図 4～6号土坑

7号土坑 (第34・38図 図版12)

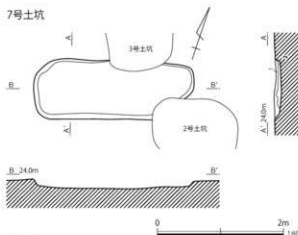
5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで中央に位置する。

平面形状は長方形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸2.55m、短軸0.92m、深さ0.12mを測る。

覆土は2層に分層され、1層が黒褐色土、2層が暗褐色土である。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

7号土坑



7号土坑
1 黒褐色土 ローム粒少量含む
2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含む

9号土坑 (第34・38図 図版12)

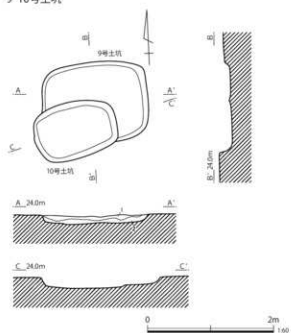
5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで北東に位置する。10号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形状は長方形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸1.65m、短軸1.27m、深さ0.14mを測り、重複する10号土坑より掘削深度が浅い。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で2層に分層される。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

9・10号土坑



9号土坑
1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含む
2 暗褐色土 1層より色調明るい

10号土坑 (第34・38図 図版12)

5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで北東に位置する。9号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形状は長方形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸1.34m、短軸0.90m、深さ0.20mを測り、重複する9号土坑より掘削深度が深い。

覆土は記録されておらず、不明である。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

第38図 7・9・10号土坑

8号土坑 (第34・39図 図版12)

5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで中央東に位置する。11号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形状は楕円形、断面形状は逆台形状である。

検出された規模は長軸1.92m、短軸0.60m、深さ0.22mを測り、重複する11号土坑より掘削深度が深い。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で2層に分層される。

遺物は出土しておらず、本土坑の時期は不明である。

11号土坑 (第34・39図 図版12・19)

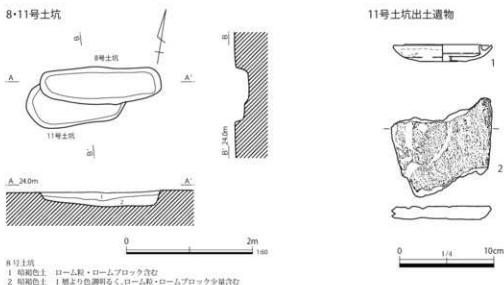
5区1号溝の区画内、南西部に集中する土坑群のなかで中央東に位置する。8号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形状は楕円形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸1.58m、短軸0.70m、深さ0.13mを測り、重複する11号土坑より掘削深

度が浅い。

覆土は記録されておらず、不明である。

遺物は陶器1点(第39図1)と板碑1点(第39図2)を掲載した。1は鉄軸が施された燈火受付皿で、18世紀代の瀬戸・美濃産である。2は緑泥片岩の板碑の破片であり、欠損後に受熱した痕跡がある。月輪・主尊種子及び蓮台の一部が残るものの紀年銘は認められず、遺存する梵字は阿弥陀如来を示したものと推定される。



第39図 8・11号土坑・11号土坑出土遺物

第10表 11号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	陶器 燈火受付皿	受: (8.0) 口: (10.3) 底: (5.0) 高: 1.8	堅緻 胎土色: 褐灰色	褐色	良好	ロクロ成形。鉄軸。	40%	覆土	瀬戸・美濃産 18世紀代
2	板碑	長: 10.5+ 幅: 10.7+ 厚: 1.5+ 重: 212.4+	—	—	—	石材: 緑泥片岩 大半を欠損し、月輪・主尊種子及び蓮台の一部が残るものの紀年銘は認められない。梵字は阿弥陀如来を示したもののか。欠損後に受熱の痕跡あり。	一部 残存	覆土	中世

(4) ビット

1号ビット (第34・40・41図 図版12)

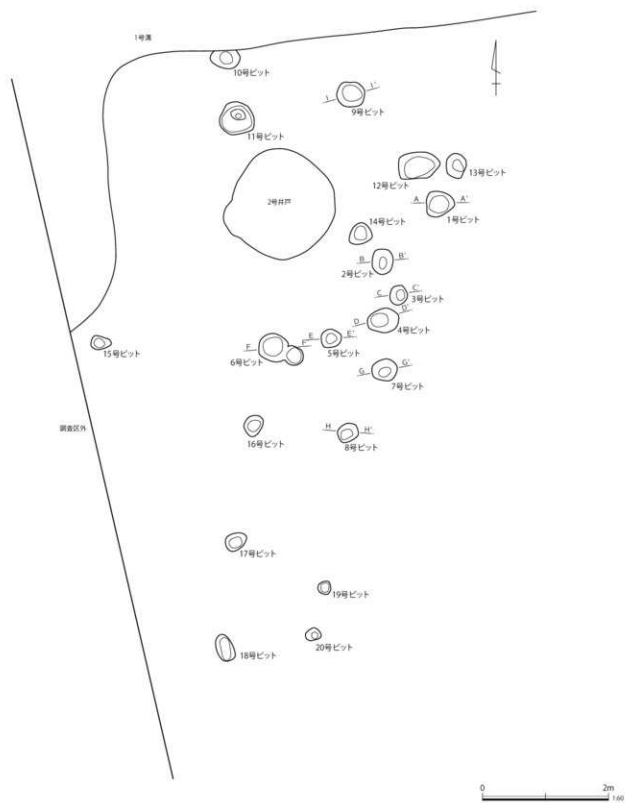
5区1号溝の区画内、北西部に集中するビット群のなかで北東側に位置する。

平面形状は円形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸0.45m、短軸0.42m、深

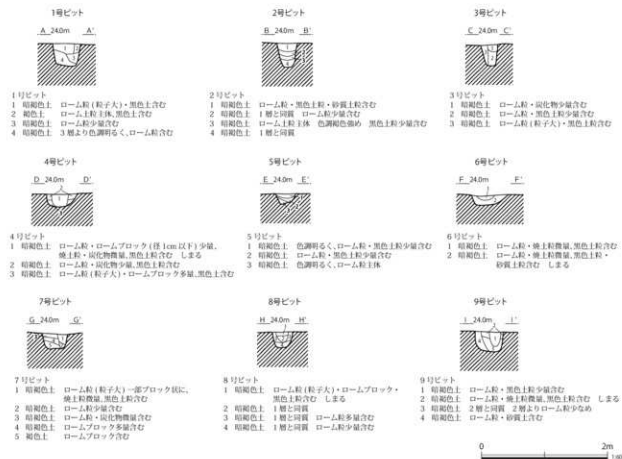
さ0.35m、底面標高23.61mを測る。

覆土は4層に分層され、1・3・4層が暗褐色土、2層が褐色土である。

遺物は出土しておらず、本ビットの時期は不明である。



第40図 1～20号ビット



第41図 1～9号ビット

2号ビット (第34・40・41図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するビット群のなかで中央やや北東寄りに位置する。

平面形状は円形、断面形状はU字状である。検出された規模は長軸0.40m、短軸0.33m、深さ0.38m、底面標高23.50mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で4層に分層される。

遺物は出土しておらず、本ビットの時期は不明である。

3号ビット (第34・40・41図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するビット群のなかで中央やや東寄りに位置する。

平面形状は円形、断面形状はU字状である。検出された規模は長軸0.32m、短軸0.27m、深さ0.33m、底面標高23.50mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で3層に分層される。断面には、柱痕跡が認

められる。

遺物は出土しておらず、本ビットの時期は不明である。

4号ビット (第34・40・41図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するビット群のなかで中央やや東寄りに位置する。

平面形状は楕円形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸0.52m、短軸0.37m、深さ0.20m、底面標高23.64mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で3層に分層される。断面には、柱痕跡が認められる。

遺物は出土しておらず、本ビットの時期は不明である。

5号ビット (第34・40・41図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するビット群のなかで南側に位置する。

平面形状は円形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸0.32 m、短軸0.28 m、深さ0.16m、底面標高23.67mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で3層に分層される。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

6号ピット (第34・40・41図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで南側に位置する。

平面形状は双円形、検出された規模は長軸0.75 mであり、2基の平面円形のピットが重複している可能性が考えられる。西側の掘り込みは断面形状は逆台形状、径0.48 m、深さ0.14m、底面標高23.66mを測る。東側の掘り込みは径0.28mであり、断面については記録がないため不明である。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で2層に分層される。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

7号ピット (第34・40・41図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで南東側に位置する。

平面形状は円形、断面形状は逆台形状である。検出された規模は長軸0.41 m、短軸0.35 m、深さ0.25m、底面標高23.62mを測る。

覆土は5層に分層され、1～4層が暗褐色土、5層が褐色土である。断面には、柱痕跡が認められる。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

8号ピット (第34・40・41図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで南側に位置する。

平面形状は円形、断面形状はU字状である。検出された規模は長軸0.34 m、短軸0.28 m、深さ0.25m、底面標高23.63mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で4層に分層される。断面には、柱痕跡が認められる。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

9号ピット (第34・40・41図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで北側に位置する。

平面形状は円形、断面形状はU字状である。検出された規模は長軸0.45 m、短軸0.40 m、深さ0.30m、底面標高23.58mを測る。

覆土は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で4層に分層される。断面には、柱痕跡が認められる。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

10号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで北側に位置する。1号溝と重複し、新旧関係は不明である。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は円形、検出された規模は長軸0.47 m、短軸0.28 mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

11号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで北側に位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は円形で、底面中央に円形の窪みがある。検出された規模は長軸0.54 m、短軸0.51 mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

12号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで北東側に位置する。なお、断面につい

では記録がないため割愛する。

平面形状は楕円形、検出された規模は長軸0.67m、短軸0.43mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

13号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで北東側に位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は楕円形、検出された規模は長軸0.40m、短軸0.33mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

14号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで中央やや北東寄りに位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は円形、検出された規模は長軸0.37m、短軸0.33mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

15号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで西側に位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は楕円形、検出された規模は長軸0.33m、短軸0.23mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

16号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、北西部に集中するピット群のなかで南側に位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は円形、検出された規模は長軸0.33m、短軸0.30mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

17号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、西部中央に位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は楕円形、検出された規模は長軸0.35m、短軸0.26mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

18号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、西部中央に位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は楕円形、検出された規模は長軸0.44m、短軸0.26mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

19号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、西部中央に位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は円形、検出された規模は長軸0.21m、短軸0.20mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

20号ピット (第34・40図 図版12)

5区1号溝の区画内、西部中央に位置する。なお、断面については記録がないため割愛する。

平面形状は楕円形、検出された規模は長軸0.25m、短軸0.20mを測る。

遺物は出土しておらず、本ピットの時期は不明である。

(5) 溝

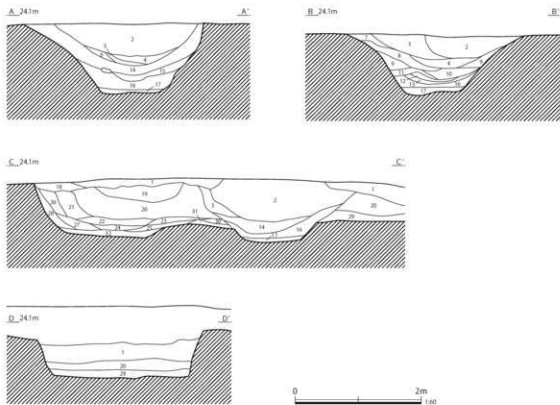
1号溝 (第34・42・43図 図版12～14・19)

1号溝は調査区西壁以外の周囲を「コ」の字状に走行し北西隅で南へ屈曲している。南北の検出長はそれぞれ17.5m、東西の検出長が17.32mであり、北西部で溝が屈曲していることから、溝によって一辺15m程度、ほぼ正方形に区画されていたと推定される。その区画内には井戸・土坑・ピットが確認されている。南東部に、南辺の溝に



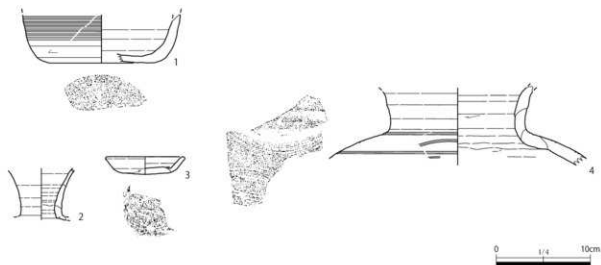
第42図 1号溝 (1)

III 発見された遺構と遺物



- 1 暗褐色土 色調明るく、ローム粒・焼土粒微量、黒色土ブロック状(楕状)を含む (掘作土に近い)
- 2 暗褐色土 色調明るく、ローム粒・ロームブロック(径2cm以下)・黒色土ブロック(径1cm以下)・礫(粘土質)・緑泥片石・花崗片を含む
- 3 暗褐色土 1層と近似 1層より色調暗く、炭化物を微量含む
- 4 暗褐色土 2層と同質 黒色土多量含む
- 5 暗褐色土 4層と同質
- 6 暗褐色土 4層と同質
- 7 暗褐色土 ローム粒・炭化物少量、黒色土粒含む
- 8 暗褐色土 7層と同質 7層よりローム粒(一部ブロック状)多量含む
- 9 暗褐色土 ローム粒多量(粒子大)、黒色土粒含む
- 10 暗褐色土 ローム粒・砂質土粒・黒色土粒含む
- 11 暗褐色土 ロームブロック多量、黒色土粒含む
- 12 暗褐色土 10層と同質 色調暗い
- 13 暗褐色土 10層と同質 ローム粒多量含む
- 14 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒含む
- 15 暗褐色土 14層と同質 14層より色調明るい
- 16 暗褐色土 14層と同質 14層より色調暗い

- 17 暗褐色土 ローム粒(粒子大)・黒色土粒含む 砂質土
- 18 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒・焼土粒微量含む
- 19 黒褐色土 ローム粒少量、焼土粒、炭化物微量含む
- 20 暗褐色土 19層と同質 19層より色調やや明るい
- 21 黒褐色土 19層と同質 20層より色調暗い
- 22 黒褐色土 黄褐色ローム粒少量含む
- 23 黒褐色土 黄褐色ローム粒少量含む
- 24 黒褐色土 色調黒色が強く、黄褐色ローム粒少量含む
- 25 暗褐色土 色調明るく、黄褐色ローム粒微量含む 砂質土
- 26 暗褐色土 ローム上(一部ブロック状)、炭化物微量含む
- 27 暗褐色土 ローム上(一部ブロック状)多量、黒色土含む
- 28 暗褐色土 ローム上(一部ブロック状)多量含む
- 29 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒含む 砂質土
- 30 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒含む
- 31 暗褐色土 色調明るく、ローム粒(粒子大)多量、黒色土粒含む
- 32 黒褐色土 ローム粒(粒子大)・砂質土・黒色土(粒子大)含む



第43図 1号溝(2)・同出土遺物

第11表 1号溝出土遺物観察表

番号	器種	法量	含有物	色調	焼成	技法・その他	残存	出土位置	備考
1	須恵器 平底瓶	底:(11.4) 高:(5.1)	長・チ	内面:黄灰色、 外面:黄灰色	還元	ロクロ成形。体部下位から底部右回転 隠削り。	底部 25%	覆土	6世紀代
2	須恵器 壺か	高:(5.5)	長・チ	内面:褐灰色、 外面:灰黄褐色	還元	ロクロ成形。	頸部 破片	覆土	古墳時代 か
3	かわらけ 小皿	口:(8.0) 底:(5.5) 高:1.9	石・針	にぶい黄褐色	良好	手づくね。 外面口縁部に横方向の撫で、体部に撫 で、底部無調整。	40%	覆土	12世紀 中葉～ 13世紀 後葉
4	陶器 壺	高:(8.2)	長・石	灰黄色	良好	ロクロ成形。渥美産。 灰軸蓮弁文壺。平行する2条の沈線間 に、花卉を表現したと考えられる半円 弧文が充填される。	頸部～ 肩部 破片	覆土	渥美産 12世紀 後半～ 13世紀 前半

直交して5.80m以上の溝状の掘り込みが設けられている。堆積状況ではこの直交した溝状の部分埋め戻して、東西方向の溝が掘削されていることが認められる。

幅は2.10～2.88m、深さ1.00m前後、底面標高23.0m前後を測り、断面形状は逆台形状である。南東部にある直交する溝状部分は、深さ0.90m程度でやや掘り込みが浅い。

覆土は32層に分層され、その内18～32層は南東部の溝状部分の埋土である。溝の覆土である1～17層は暗褐色土を主体とし、含有物やしまりの差異で分層される。レンズ状堆積であることから自然堆積と考えられ、特に1層は表土である耕作土に近似している。土層観察では流水の痕跡は見当たらないが、発掘調査時は常に水が湧き出ている状態であり、ある程度埋没するまでは溝に

滞水していた可能性がある。

遺物は須恵器2点(第43図1・2)、かわらけ1点(第43図3)、陶器1点(第43図4)を掲載した。全て、覆土から出土している。1は6世紀代の平底瓶、2は古墳時代の壺の可能性があり、両者ともに混入と考えられる。3は全体の4割程度が残存している手づくねのかわらけであり、12世紀中葉～13世紀後葉と考えられる。4は、渥美産の灰軸蓮弁文壺の頸部から肩部破片であり、並行する2条の沈線間に花卉を表現したと考えられる半円文が充填され、12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

出土した中世初頭の遺物は何れも破片であるが時期に整合性があり、溝が機能した時期は中世初頭と考えられる。

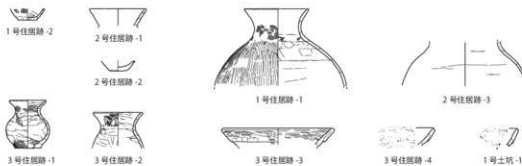
IV 総括

本書では、新町遺跡にて平成3・9・16年に実施された3・4・5区の発掘調査の成果を報告した。主要となる遺構の時期は区毎に異なり、3区では古墳時代前期、4区では古墳時代後期、5区では中世初頭が主体である。以下、各区の遺構と遺物を概観し、総括とする。

3区では古墳時代前期の竪穴住居跡3軒（1～3号住居跡）と時期不明の土坑4基（1～4号土坑）、炉跡1基（1号炉跡）、溝1条（1号溝）が検出された。住居跡3軒にしては遺物の出土量が少なく、第44図に本書で掲載した3区の土器を全てまとめた。全体的に遺存状態がよくないなか、比較的残存状態が良いといえるものは壺2点（1号住居跡-1、3号住居跡-1）と甕1点（1号住居跡-6）である。以下、器種毎に3区の土器

を概観する。壺は、小型壺と大型壺に大別される。口縁部が残存している小型壺は全て直口壺であり、（2号住居跡-1、3号住居跡-1・2）、大型壺は直口壺（1号住居跡-1）と複合口縁壺（3号住居跡-3・4、1号土坑-1）が出土している。複合口縁壺の内、口唇部と複合部下端に刻み目が施されているものが2点（3号住居跡-4、1号土坑-1）認められる。甕は全体が把握できる個体はないが、台部がまとまって出土していることから、台付甕が主体であったと考えられる。口縁部が残存している2点（2号住居跡-4、3号住居跡-5）は、口唇部の刻み目が施されておらず、刷毛目も喪失している。岩鼻式土器の甕の小破片も出土している（1号住居跡-7）。高坏は2点とも脚部のみが残存しており、小型のもの

壺



甕



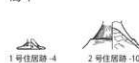
台付甕



甕 (岩鼻式土器)



高坏



器台



鉢



甕



ミニチュア土器



第44図 3区出土土器一覧

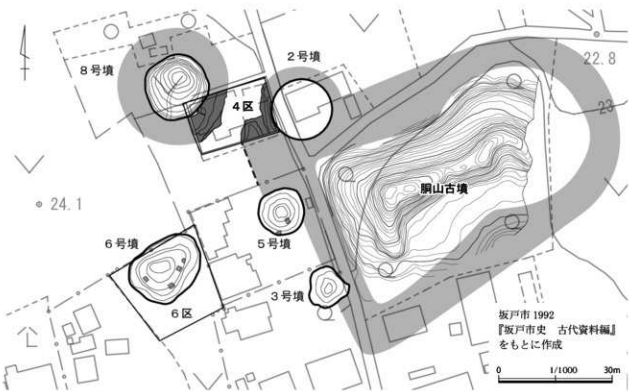
(1号住居跡-4)と、有段のもの(2号住居跡-10)が確認できる。器台は小型器台の受け部が1点(2号住居跡-11)、鉢は単口縁で中型のものが1点(1号住居跡-5)、甗は単孔のものが1点(1号住居跡-6)それぞれ出土している。

同じく古墳時代前期の集落が検出されている宮裏遺跡(坂戸市教育委員会2015・2017)では、東松山市反町遺跡(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団2011)における出土土器の検討結果と対比して、編年の位置付けが提案されている。本書の3区から出土した古墳時代前期の土器についても少ないながら概観すると、口縁部に刻み目を伴う壺や岩鼻式土器の甗が出土しているものの何れも小破片であることから、住居跡の時期がⅡ-1期に遡るとは考えにくい。甗が刷毛目を喪失していることや甗や壺の加飾性が低いことから、Ⅱ-2期以降の様相を示していると考えられ、3区で検出された住居跡の時期は古墳時代前期後半〜末の範疇で収まると考えられる。

4区では新町古墳群の2・8号墳の周溝の一部が検出された。新町古墳群の盟主墳である駒山古墳(新町1号墳)は墳丘の全長67mで、トレン

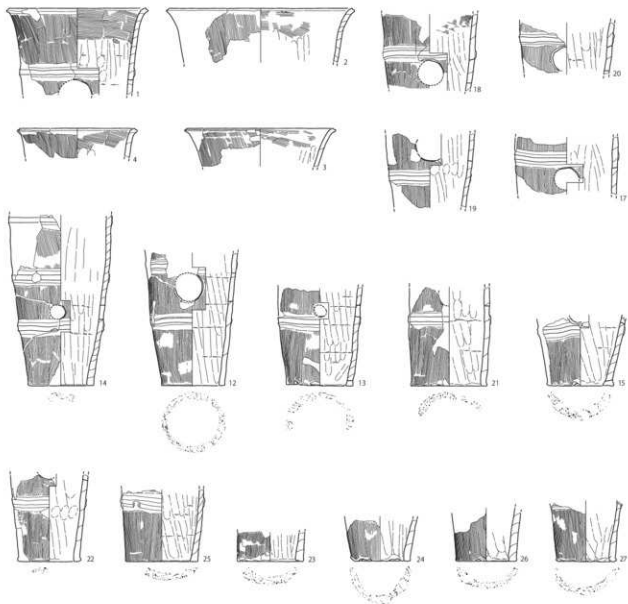
チ調査では幅11mの周溝が確認されている。今回調査された2号墳は同古墳の北西側に隣接し、その西方に8号墳が位置している。第45図にて、4区で検出された周溝と周辺の古墳の位置関係を示した。この図は、『坂戸市史』に掲載されている古墳の図面及びスケッチ図と記載されている墳丘の規模をもとに作成しているため、正確な図面ではない。

2・8号墳からは何れも埴輪が出土しており、主要なものを第46図に示した。両古墳から出土した円筒埴輪のうち口縁部から基部まで残存している個体は出土していないが、8号墳には3条4段のもの(8号墳-14)が確認できる。外面全体に縦方向の刷毛目が施され、完存する透孔は確認できないが、残存状況から全て円孔であったと推定される。内面調整は、8号墳が縦方向の撫でを基本とし口縁部から体部上端のみ横から斜方向の刷毛目が施されているのに対し、2号墳は全面で刷毛目が確認できる。また1段目の長胴化の傾向が、8号墳ではやや認められる程度だが、2号墳では明確に認められる(2号墳-3)。8号墳の円筒埴輪は、駒山古墳の北西部で出土した埴輪

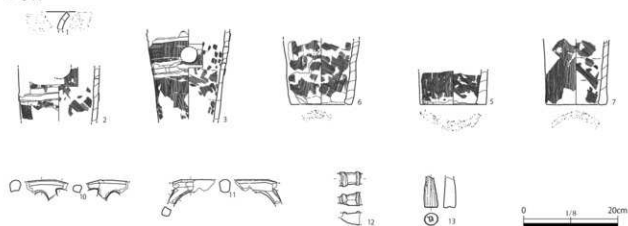


第45図 4区と新町古墳群

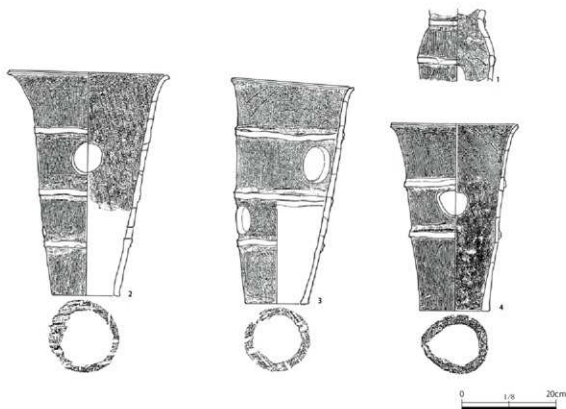
8号墳



2号墳



第46图 4区出土埴輪一覽



第 47 図 新町古墳群円筒埴輪輪

円筒棺（第 47 図）と規格や調整方法が類似しているが、埴輪棺の方が透孔が半円状に近い形状のものが含まれているなどの古い様相が認められる。なお、2号墳から形象埴輪が破片ではあるが出土している。

8号墳は昭和40年に封土を削平する際に実施された調査で、埴輪片や土師器片の採集が少なかったことや、埋葬施設が発見できなかったことから終末期古墳であると推定されていた（坂戸市1992）。しかし、今回の調査で周溝覆土内からまわって埴輪が出土したことから、8号墳は後期後半に築造されたことが判明した。2号墳の周溝覆土から出土した埴輪は、数は少ないものの、8号墳のものの特徴に明確な差異が認められることから、8号墳の埴輪が混入したのではなく、2号墳に伴う埴輪であると判断できる。2・8号墳の円筒埴輪を比較すると、1段目の長胴化が顕著な2号墳のほうが新しいと考えられる。また、2号墳の円筒埴輪の内面刷毛目調整は鴻巣市生出家埴輪窯跡で認められるような調整工程の省略化を示している可能性がある（山崎2000）。新町古墳

群で出土した円筒埴輪の新旧の様相が、築造の順番を反映しているとし、出土位置から埴輪棺と駒山古墳がほぼ同時期であると仮定するならば、新町古墳群では後期後半に駒山古墳が最初に築造され、次いで8号墳、2号墳の順で何れも後期後半の範囲に築造されたということを想定することができる。

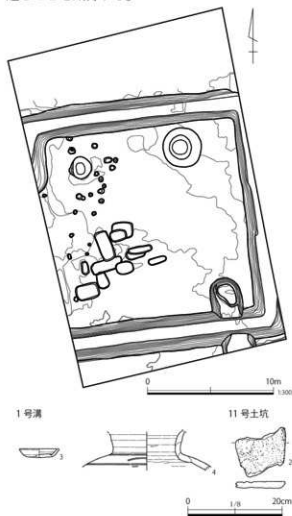
5区では、1号溝によって一辺15m程度、ほぼ正方形に区画された範囲内に井戸2基（1・2号井戸）、土坑11基（1～11号土坑）、ピット20基（1～20号ピット）が検出された（第48図）。これらの遺構は、位置関係から区画溝である1号溝が機能している間に構築されたと考えられる。1号溝は幅は2.10～2.88m、深さ1.00m前後、底面標高23.0m前後を測り、断面形状は逆台形状である。調査時の状況からある程度埋没するまでは溝に滞水していた可能性がある。1号溝の覆土から、渥美産の灰釉蓮弁文壺と手づくねのかわらけ（第48図）が相伴して出土したことが注目できる。北武蔵における手づくねのかわらけは、12世紀中葉～13世紀後葉に存在し、出

土量・遺跡数がともに限られているとされている(水口2016)。渥美産の壺は12世紀後半～13世紀前半と考えられ、かわらけの時期と整合する。両者ともに破片資料ではあるが普遍的に出土する遺物ではないことから、溝が機能した時期は中世初頭まで遡る可能性が高い。

区画内の南西部に偏在する土坑群は方形基調のもの(2・5・7・9・10土坑)と楕円形のもの(1・6・8・11)があり、規模は長軸1.03～2.55m、短軸0.51～1.27m、深さ0.10～0.35mである。出土した遺物は非常に少なく、図示できたのは11号土坑から出土した18世紀代の瀬戸・美濃産の燈火受付皿と板碑破片(第39図1・2)のみである。両遺物には時期差があるが、5区全体の遺構と出土遺物を考慮すると(第48図)、燈火受付皿を混入と考えたい。土坑の性格については、形状を考えると俗に「イモ穴」と呼ばれる貯蔵穴や土壇墓である可能性が考えられる。溝に区画された範囲内に方形や長方形の土坑群が調査された事例は、埼玉県熊谷市に所在する業師堂根遺跡(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1998)や群馬県高崎市高岡高根遺跡(高崎市教育委員会2009)で類例があり、前者では土坑内から15～16世紀を中心とする渡来銭や皿類などが出土しており、副葬品を伴うことから土壇墓として認められる。また、埼玉県ふじみ野市本村遺跡(埼玉県大井町遺跡調査会2009)は中世～近世前半にかけての大井郷の村落的性格をもった遺跡であり、隣接する第43・48地点の発掘調査成果では溝を境界として「何らかの重層的な土地利用」が展開していたとされ、方形の平面形式を有する掘立柱建物の存在が堂舎などの宗教施設の可能性をもつことや板碑の出土から宗教的な空間であったことが指摘されている(埼玉県大井町遺跡調査会2004)。5区についても、溝の区画外に全く遺構が存在せず一辺15m程度の区画内に分布が限定されていることや出土遺物の様相から、この「区画された空間」は一般的な村落とは異なる土地利用をされていたと推察される。その空間に存在する土坑群は、貯蔵穴よりはむしろ土壇墓である可能性が高く、範囲内の空地には礎石建ての堂舎

のような宗教施設が存在した可能性も考えられる。

新町遺跡では、1・3区の調査から台地縁辺部が弥生時代や古墳時代前期に集落として利用されていることが明確している。古墳時代後期～終末期にかけて入間地域で最大規模の前方後円墳である胸山古墳を中心に古墳群が形成されており、昭和の時代から複数回調査されているほか、4・6・7区においても古墳の周溝や墳丘・石室などが調査されている。続く奈良・平安時代は、発掘調査では遺構が発見されておらず、どのように土地利用がなされていたかは不明である。中世初頭には、5区において区画溝を伴う遺構群が展開しており、遺跡内の一部で一般集落とは異なると土地利用がなされていたと考えられる。今後、調査事例が増加することによって、更なる遺跡の解明が進むことを期待する。



第48図 5区の溝に区画された遺構群と中世の遺物

註 1

『反町遺跡Ⅱ』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2011）では、反町遺跡第 3 次調査の住居址から出土した土器について時期区分が行われ、古墳時代前期をⅡ期とし、その中で三細分している。同書に記された各細分の県内の他遺跡及び他地域の土器群との平行関係を、以下に記す。

Ⅱ-1 期：大宮台地では書上編年 2 段階、蓮田市ささら遺跡新段階、前原遺跡 1 期（古）段階の資料が該当する。他地域では比田井編年Ⅱ期、赤塚次郎氏の廻間編年Ⅲ期 2・3 段階、田嶋明人氏の漆町 8 群、関川高功氏の鎌向Ⅳ式、寺沢薫氏の布留 1 式、米田敏行氏の布留式Ⅰ期、新潟協会編年北武蔵Ⅲ～Ⅳ期、新潟シンボ編年 7～8 期に相当する。

Ⅱ-2 期：大宮台地では書上編年 2～3 段階、前原遺跡 1 期（新）段階、児玉地域では川越田遺跡古段階の資料が該当する。他地域では比田井編年Ⅱ～Ⅲ期、廻間編年Ⅲ期 4 段階～松河戸 1 式（古）、漆町 9～10 群、寺沢氏の布留 2 式、米田氏の布留式Ⅱ期、新潟協会編年北武蔵Ⅳ期、新潟シンボ編年 8～9 期に相当する。

Ⅱ-3 期：大宮台地では書上編年 3 段階、前原遺跡 2 段階、児玉地域では川越田遺跡新段階の資料が該当する。他地域では比田井編年Ⅲ期、廻間編年松河戸 1 式、漆町 10・11 群、寺沢氏の布留 3・4 式、米田氏の布留式Ⅲ・Ⅳ、新潟シンボ編年 10 期に相当する。

【引用・参考文献】

坂戸市 1992 『坂戸市史』古代資料編

坂戸市教育委員会 2001 『終遺跡』

坂戸市教育委員会 2015 『新山古墳群 3 区』

坂戸市教育委員会 2015 『宮裏遺跡 2』

坂戸市教育委員会 2016 『宮裏遺跡 3』

坂戸市教育委員会 2017 『宮裏遺跡 4』

埼玉県大井町遺跡調査会 2004 『本村遺跡Ⅲ 浄禅寺跡遺跡Ⅱ 苗間東久保遺跡Ⅱ 大井氏館跡遺跡Ⅱ』

大井町遺跡調査会報告第 12 集

埼玉県大井町遺跡調査会 2009 『本村遺跡Ⅰ 大井氏館跡遺跡Ⅰ』大井町遺跡調査会報告第 7 集（第 2 分冊）

（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2011 『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 380 集

（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998 『薬師堂根遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 200 集

高崎市教育委員会 2009 『高岡高根遺跡』高崎市文化財調査報告書第 244 集

水口由紀子 2016 『武蔵・下野の土器』『中世武士と土器』高志書院

山崎 武 2000 『埼玉県における円筒埴輪の編年について』『埴輪研究会誌』第 4 号 埴輪研究会

写真図版



1 3区調査区全景



2 1号住居跡



1 1号住居跡 P-2



2 1号住居跡遺物出土状況



1 1号住居跡遺物出土状況



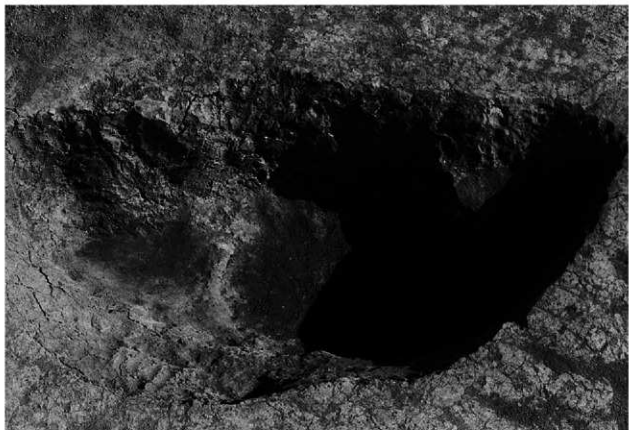
2 1号住居跡遺物出土状況



1 2号住居跡



2 3号住居跡



1 1号土坑



2 2号土坑



1 3号土坑



2 1号炉跡



1 4区遠景



2 4区調査区全景



1 2号墳



2 2号墳



1 2号墳遺物出土状況



2 2号墳遺物出土状況



1 8号墳



2 8号墳



1 8号墳遺物出土状況



2 8号墳遺物出土状況



1 5区遠景



2 5区調査区全景



1 1号溝



2 1号溝



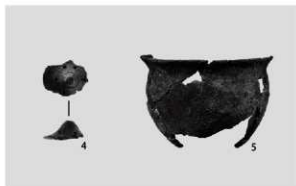
1 1号溝遺物出土状況



2 1号溝遺物出土状況



1



4

5



6

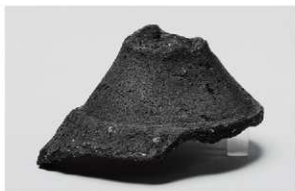
1号住居跡



5



6



10

2号住居跡

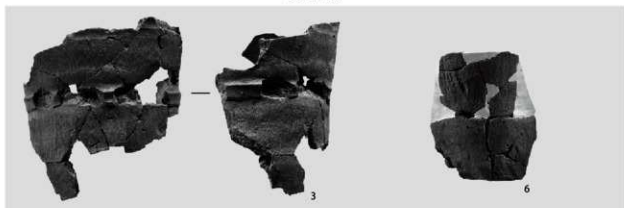


1



2

3号住居跡



3



6



7



10



11



12



13



20



21

(#5=1/3)

2号墳





15



16



17



18



19



20



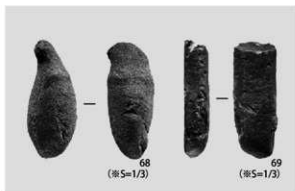
21



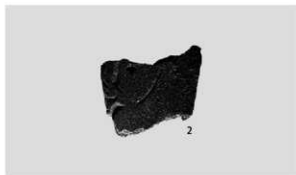
22



24



27
8号墳 (3)



11号土坑



1号溝

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんまちいせきさんく・よんく・ごく							
書名	新町遺跡3区・4区・5区							
副書名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤野一之・小林朋恵							
編集機関	株式会社シン技術コンサル							
編集機関所在地	〒370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井311番地1							
発行機関	埼玉県坂戸市教育委員会							
発行機関所在地	〒350-0292 埼玉県坂戸市千代田一丁目1番1号 TEL 049-283-1331							
発行年月日	2020年2月20日							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
新町遺跡3区	埼玉県坂戸市大字石井地内	11239	27-068	35°58'23"	139°24'36"	1991.2.7 ～3.1	244㎡	記録保存
新町遺跡4区	埼玉県坂戸市大字石井地内			35°58'25"	139°24'43"	1997.5.7 ～6.17	306㎡	記録保存
新町遺跡5区	埼玉県坂戸市大字石井地内			35°58'21"	139°24'48"	2004.9.13 ～10.29	454㎡	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新町遺跡3区	集落	古墳時代 時期不明	竪穴住居跡 土坑 溝	3軒 4基 1基 1条	土師器壺・甕・ 台付甕・高坏・器台・ 鉢・甌・ ミニチュア土器		古墳時代前期の集落	
新町遺跡4区	古墳群	古墳時代	古墳	2基	円筒埴輪・形象埴輪・ 須恵器甕		新町古墳群2・8号 墳の周溝の一部を調査	
新町遺跡5区	墓域か	中世	井戸 土坑 ビット 溝	2基 11基 20基 1条	陶器・かわらけ・ 板碑		区画溝を伴う遺構群	
要 約	<p>新町遺跡と新町古墳群は、北に飯盛川や越辺川を望む坂戸台地縁辺に広がる遺跡である。本書は、平成30・16年に実施された新町遺跡3・4・5区の発掘調査成果の報告である。主要となる遺構の時期は区毎に異なり、3区では古墳時代前期、4区では古墳時代後期、5区では中世初頭が主体である。3区では、古墳時代前期後半～末の竪穴住居跡が3軒調査され、古墳時代前期の土器が少量ではあるが出土している。4区では、古墳時代後期～終末期にかけて形成された新町古墳群のなかの2・8号墳の周溝の一部が調査された。周溝から出土した円筒埴輪によって、両古墳ともに古墳時代後期後半に築造され、8号墳が先行し、2号墳が後出することが判明した。5区では区画溝を伴う中世初頭の遺構群が展開しており、一般集落とは異なると土地利用がなされていたと考えられる。</p>							

新町遺跡 3区・4区・5区

2020年2月20日 発行

発行者 埼玉県坂戸市教育委員会
埼玉県坂戸市千代田一丁目1番1号

印刷 細谷印刷株式会社
群馬県伊勢崎市今泉町二丁目939番地5